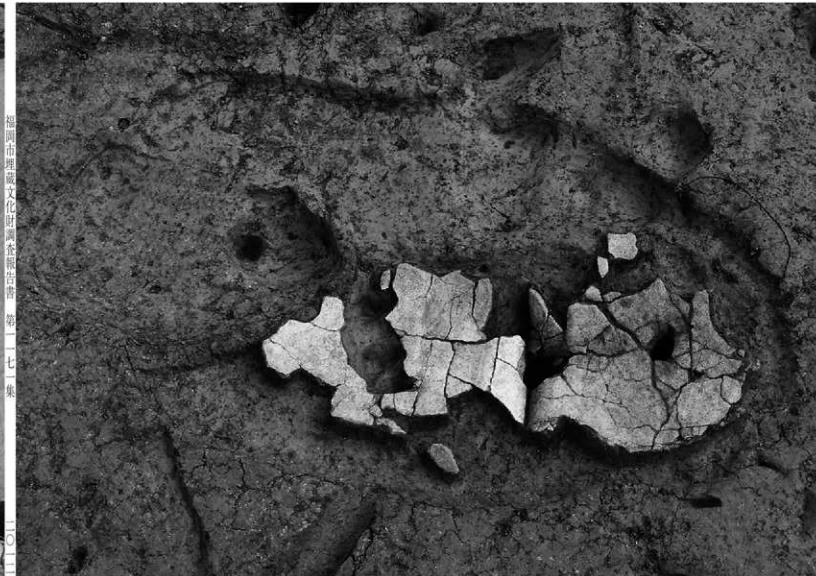


南八幡遺跡 9

南八幡遺跡 9

—南八幡遺跡第17次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1171集



福岡市教育委員会

2012
福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区元町一丁目地内における共同住宅の建設に先立つて行われた南八幡遺跡第17次調査の報告書です。

南八幡遺跡の周辺は、『魏志倭人伝』に見える「奴国」の領域の中心域の一部と推定されており、遺跡西側に隣接する春日市の北部には、「奴国」の首都とも言われる須玖岡本遺跡群が存在しています。南八幡遺跡においても、これまでの発掘調査の成果により、弥生時代および奈良時代の集落が営まれていたことが明らかになっています。

今回も、弥生時代終末期の壇場や、弥生時代の堅穴住居や建物、また奈良時代の建物などが検出されています。特に奈良時代の遺構と遺物は、南八幡遺跡周辺の遺跡に数多く分布しており、当時の集落の広がりやその意義を考える上で重要な成果を得ることができました。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、研究資料として、また地域の歴史の学習の材料として活用して頂きましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力をいただき、有限会社アイティーオーをはじめとする関係各位の方々に対し、心より感謝の意を表す次第であります。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

調査基本情報一覧表

遺跡名	南八幡遺跡	調査次数	17次	調査略号	MHM-17
調査番号	0926	分布図図幅名	13. 雜爾隈	遺跡登録番号	0200051
事前審査番号	21-2-310	調査原因	共同住宅建設	敷地面積	578.44m ² (地盤全面積)
調査期間	平成21年(2009年)10月8日～同年11月12日	工事面積	158.06m ²	調査面積	139.2m ²
調査地	福岡市博多区元町1丁目7番1の一部				

報告書抄録

ふりがな	みなみはちまんいせき9—みなみはちまんいせきだい17じちょうさのはうこく—
書名	南八幡遺跡9
副書名	—南八幡遺跡第17次調査の報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1171
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2012年3月16日

遺跡名	みなみはちまんいせきだい17じちょうさ			
遺跡名	南八幡遺跡第17次調査			
所在地	ふくおかははかたくもとまち1じょうめ7ばん1のいちぶ			
遺跡所在	福岡市博多区元町1丁目7番1の一部			
市町村コード	40130			
遺跡番号	0051			
北緯	33度32分32.7秒 (世界測地系)			
東経	130度27分42.2秒 (世界測地系)			
調査期間	2009.10.08～2009.11.12			
調査面積(m ²)	139.2m ²			
調査原因	共同住宅建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
墓地 集落	(弥生時代～古墳時代初頭) 斎宿墓1、堅穴建物(痕跡) 6? (時期不詳) ビック多數 (柱穴および自然遺構?) (弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良時代) 掘立柱建物・柱穴列 (欄列?) 11以上	(弥生土器 (後期～終末期)、 土師器 (古墳時代前期、奈良時代)、須恵器 (奈良時代)、青磁 (近世?)、鉄製刀子 (弥生時代終末期、奈良時代)、 銅製環状品 (時期不詳))	弥生土器 (後期～終末期)、 土師器 (古墳時代前期、奈良時代)、須恵器 (奈良時代)、青磁 (近世?)、鉄製刀子 (弥生時代終末期、奈良時代)、 銅製環状品 (時期不詳)	弥生時代後期～古墳時代初頭の集落域の一部。南側は削平顯著で詳細不明。二本柱の堅穴建物があったのか。集落内に小堀裏塚。周囲に墓域がある可能性。北側は、段丘内の小さな谷部斜面で、小柱穴多数あり。弥生時代後期および奈良時代に何らかの建物や構造が営まれたとみられる。

南八幡遺跡9

—南八幡遺跡第17次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1171集

2012年3月16日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 魚住印刷

福岡市博多区大博町8-20

目 次

I. はじめに	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査の組織	3
3. 遺跡の立地と周辺の歴史的環境	5
II. 調査の記録	9
1. 調査の概要と経過	9
2. 基本土層と遺構の分布	11
3. 遺構と遺物	13
(1) 瓢棺墓 (ST)	13
(2) 竪穴建物 (住居) およびその可能性のあるもの (SC)	17
(3) 掘立柱建物 および柱穴列遺構 (SB)	21
(4) 出土遺物	24
III. まとめ	26

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成21年10月8日から同年11月12日まで発掘調査を実施した、共同住宅の建設に伴う、南八幡遺跡第17次調査の報告書である。なお、発掘調査費用は一部に国庫補助金を適用している。
2. 調査は、掘削廃土処理の都合から、およそ南北に二分割して反転して調査した。最初に調査した南側をI区、反転後の調査区をII区としている。遺構の呼称は記号化し、瓢棺墓をST、竪穴建物（「住居」とは限らないので「建物」とする）をSC、土坑をSK、柱穴などピット状遺構（自然遺構を含む可能性あり）をSP、掘立柱建物や柱穴列遺構をSB、性格不明遺構をSXとしている。なお掘立柱建物（柱穴列）や竪穴建物については、図面整理時に推定したものも含む。
3. 本書の遺構図に用いる方位北は磁北である。調査区の座標は任意のものである。国土座標については、これを調査区に入れ込もうと試みたが、近隣に適当な座標杭を見出せなかつたため、調査期間の都合から、周囲地図などを測量して道路台帳図に調査区を入れ込んでいる。またレベルは、近隣の那珂南小学校に設置されている水準点（国土地理院高さ20,8048m）から移動している。
4. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当者の久住猛雄（当時、埋蔵文化財第1課）、西拓巳、安武憲史（当時、福岡大学大学院）、相川春彦（発掘作業員）が行った。また遺物の実測は、土器・陶磁器類を西拓巳が、金属器を西澤千絵里（埋蔵文化財センター嘱託）が行った。遺構図面の製図は綱畠歩（九州大学大学院）、宇野美嘉（整理作業員）、および久住が行い、遺物図面の製図は埋蔵文化財第2課文化財担当職員の助力を得た。
5. 本書に用いる写真は全て久住が撮影した。
6. 本書の執筆と編集は久住（現、文化財整備課）が行った。
7. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。



図1 南八幡遺跡と周辺の遺跡および旧地形（ため池）(1/12,500)

（「南八幡遺跡群第8次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第862集、図4に加筆変更）

※本図における埋蔵文化財包蔵地の範囲は、一部省略があるなど、事前審査窓口の分布地図とは多少異なる部分がある。

南八幡遺跡

1. 1次 2. 2次 3. 3次 4. 4次 5. 5次 6. 6次 7. 7次 8. 8次 9. 9次

58. 11次 59. 12次 60. 15次 61. 17次（本報）62. 63. 19次 72. 13次

（0. 0次（中山平次郎「雑誌別報附近に発見せる石蓋土壙と無蓋土壙（原始的墳墓の研究）」『考古学雑誌』第21巻第9號、1931年、における調査報告地点））

糸崎遺跡

10. 1次 11. 2次（中ノ原1次）12. 3次（中ノ原2次）13. 4次 14. 5次 15. 6次 16. 7次 17. 8次 18. 9次 19. 10次

64. 14次 65. 15次 78. 17次 幸平成16年度に「中ノ原遺跡」が包蔵地登録されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第867集）。

糸崎A遺跡

20. 1次 21. 2次 22. 3次 23. 4次 24. 5次 25. 6次 66. 18次 67. 20次 68. 7次 69. 19次

76. 7次 77. 10次 （→次頁に続く）

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成21年（2009年）8月3日付で、有限会社アイティーオー企画 取締役 金田さと氏より、博多区元町一丁目7番1の一部における共同住宅建設工事に関して、文化財保護法第93条に基づく事前届出が福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課事前審査係に提出された（事前審査番号21-2-310）。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である南八幡遺跡（分布地図番号13-0051）に含まれており、周囲の発掘調査の成果から、弥生時代ないし奈良時代の遺構・遺物が存在する可能性が高いと判断された。さらに申請地地番（元町一丁目7番1）の敷地内の北側では、以前の事前審査申請において（事前審査番号20-2-456）、すでに確認調査が行われており（確認調査番号20-171）、柱穴と思しき遺構が確認されていた。そのため、同一敷地の南側にあたる本申請部分においても、周囲調査成果をあわせて判断すれば、埋蔵文化財が存在する可能性がさわめて高いと考えられた。しかしながら、建設が予定される共同住宅は、3階建鉄骨造構造であり杭打ち工事を伴うことから、申請地に埋蔵文化財が存在した場合には、工事の影響が及ぶことが懸念されたため、申請者に対して予定される建設工事を行う場合には、事前に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が必要であるとの回答を伝えた。その後、埋蔵文化財第1課と申請者側との協議の結果、記録保存のための発掘調査を共同住宅建設工事で影響が及ぶ範囲について行うことで合意を得た。そして、平成21年10月2日付で、有限会社アイティーオー企画を委託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が福岡市との間で締結された。

発掘調査は、現地における本調査を平成21年10月8日から同年11月14日まで行うこととし、平成22年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。また調査費用については、当該建設工事が零細事業者によるものであるため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助金適用要項に基づき、委託者による原因者負担分とともに一部について国庫補助金を適用することになった。

本調査は、平成21年10月8日に開始し、同年11月12日に終了した。資料整理および報告書作成については、当初契約では平成22年度に行う予定であったが、諸般の事情により平成22・23年度の2ヶ年にわたって行うこととした。

2. 調査の組織（平成21年度：本調査年度、平成22～23年度：整理・報告年度）

調査委託 有限会社アイティーオー企画 取締役 金田さと

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣（平成21・22年度）、酒井龍彦（平成23年度）

調査総括 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1課長 濱石哲也（平成21年度）

埋蔵文化財課第2課長 田中壽夫（平成22・23年度）

埋蔵文化財第1課調査係長（平成21年度）、埋蔵文化財第2課調査第1係長（平成22・23年度） 米倉秀紀

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 蔡富士寛（平成21・22年度）、木下博文（平成23年度）

調査担当 埋蔵文化財第1課調査係 久住猛雄（平成21年度、平成22・23年度は文化財整備課）

庶務担当 文化財管理課（平成21年度）、埋蔵文化財第1課管理係（平成22・23年度） 古賀とも子

（2頁 図1下の説明続き）

麦野B遺跡

26. 1次 27. 2次 28. 3次 29. 4次

麦野C遺跡

30. 1次 31. 2次 32. 3次 33. 4次 70. 5次 71. 13次 75. 7～9次

（春日市の遺跡）

34. 下大荒遺跡 2次 35. 下大荒遺跡 1次 36. 大荒遺跡（以下、「須玖岡本道路群」） 37. 須玖黒田遺跡

38. 須玖楠町遺跡 39. 須玖水町遺跡 40. 須玖永田遺跡A地点 41. 須玖五反田遺跡 2次 42. 須玖唐梨遺跡

43. 智者ヶ本遺跡 44. 須玖五反田遺跡 1次 45. 須玖永田遺跡B地点 46. 須玖坂本遺跡 47. 須玖岡本道路

48. エノコ遺跡 49. 須玖尾花町遺跡 50. 天田遺跡 51. 上平田遺跡 52. 岡本野添遺跡 53. 鰐若遺跡

54. 上畠田遺跡 55. 岡本遺跡 56. 岡本山遺跡 57. 岡本ノ上遺跡

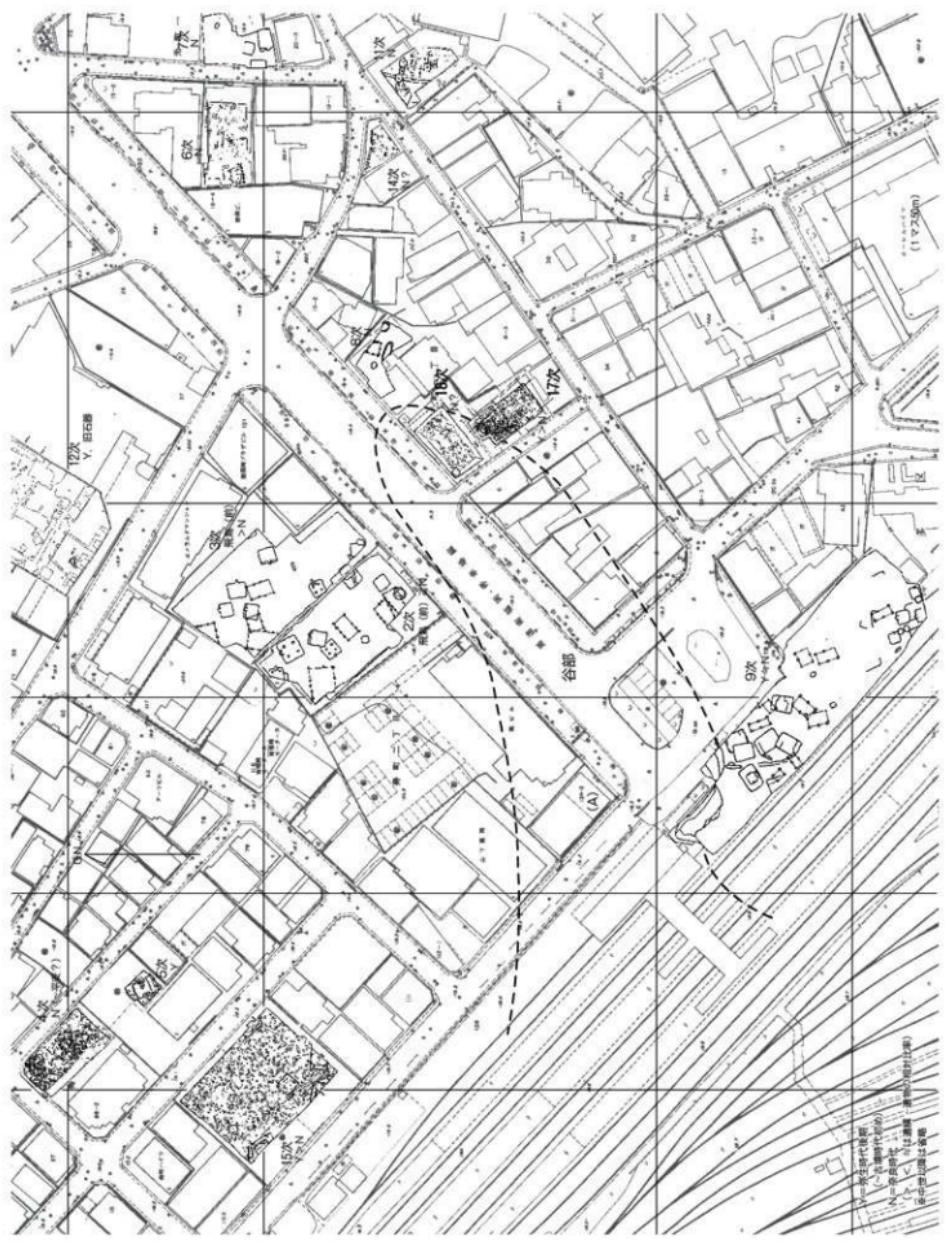


図2 南八幡17次調査の位置と周辺の調査区 (1/6,250)

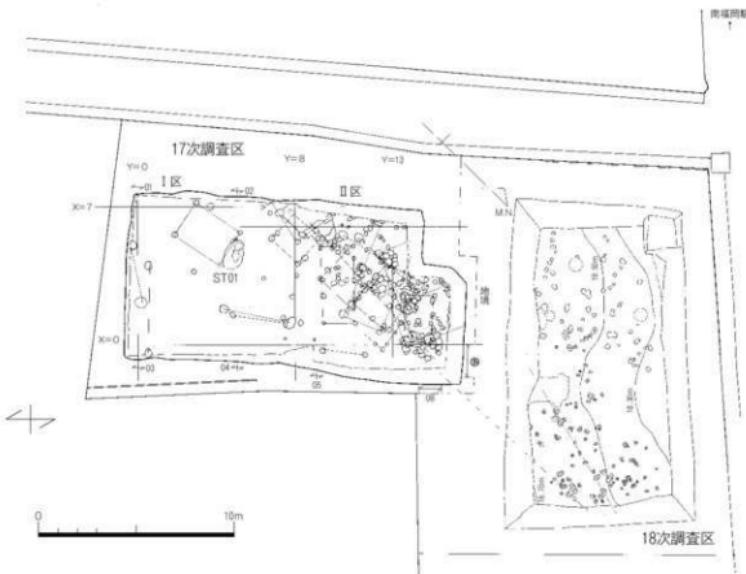


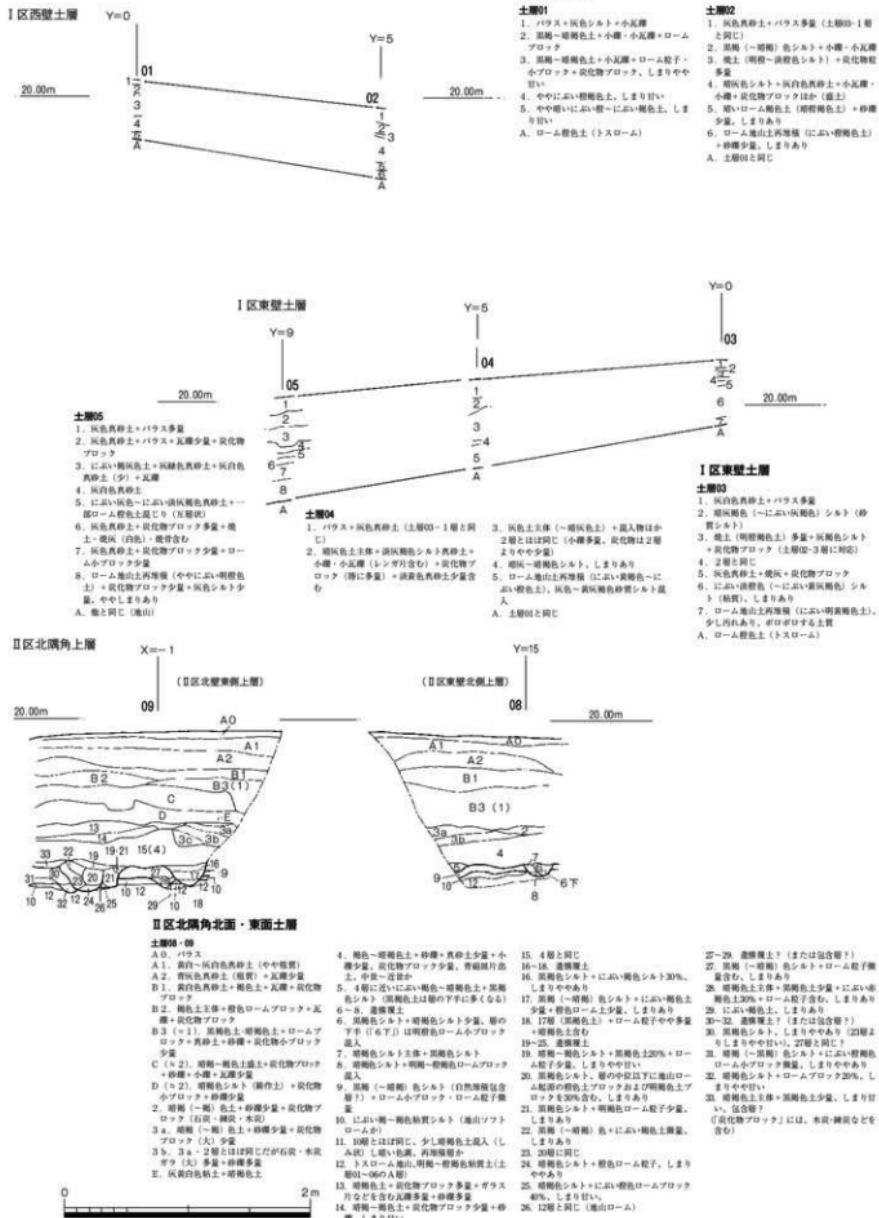
図3 南八幡17次および18次調査区の位置と周囲地割図 (1/250)

3. 遺跡の立地と周辺の歴史的環境 (図1・2)

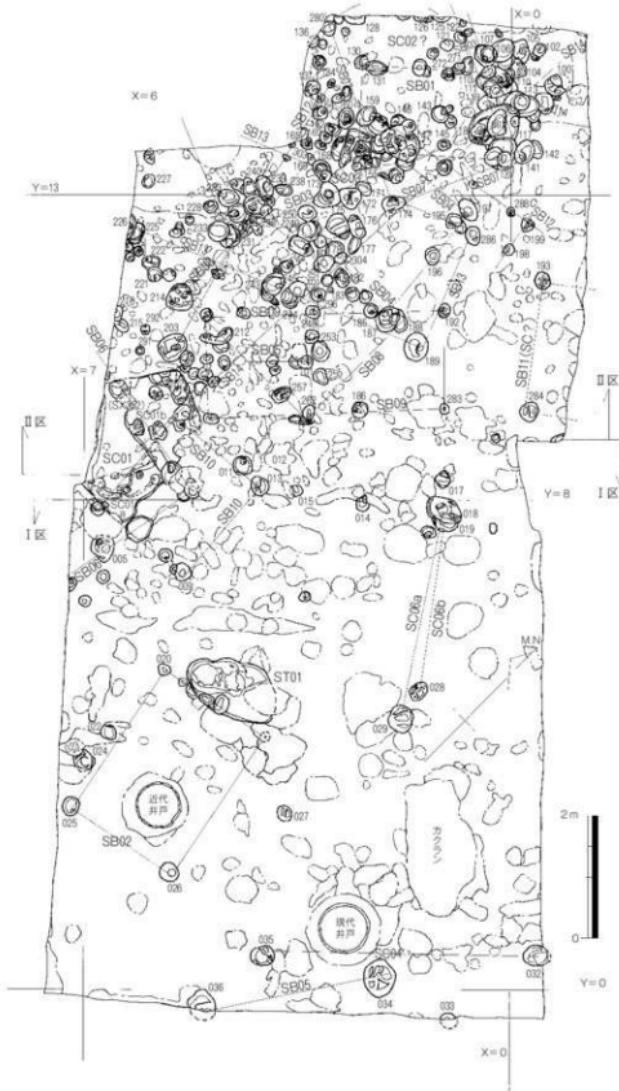
南八幡遺跡は、福岡市の大宰府にある雑餉隈丘陵上に位置する。雑餉隈丘陵は、諸岡川などによる浸食と開拓を受けて谷部が複雑に入り、支丘が八つ手状をなしている。その各支丘上に南八幡遺跡や雑餉隈遺跡、麦野A・B・C遺跡などが分布している。「雑餉隈」という地名は、大宰府官人の雑草の居住地であるとか、大宰府に関わる食糧倉庫が並んでいたことから付けられたとする説がある(『福岡県百科事典』西日本新聞社1982)。これを裏付けるように、南八幡遺跡や周囲の雑餉隈遺跡、麦野A・B・C遺跡、中ノ原遺跡(一部春日市)における検出遺構の主体は奈良時代であり、遺構数や遺構の重複も奈良時代が多い。

小河川(諸岡川の支流)が南東から北西に流れ、雑餉隈丘陵とは低地部を挟んだ西側700mの段丘および南側の春日丘陵には、弥生時代の拠点集落として名高い須玖岡本遺跡群を構成する諸遺跡がある(図1)。須玖岡本遺跡の所在する春日丘陵とその北に延びる低段丘は、「弥生銀座」とも称され、壇場墓地や弥生時代の集落遺跡が集中し、弥生時代の青銅器・ガラス生産の大半がこの遺跡群で行われていたことが、鋳型などの鋳造関係遺物の集中出土から判明してきた。「須玖岡本D地点」に集積された前漢鏡30面以上や多数の武器形青銅器などを有した「王墓」は、隣接調査区での同時期の墳丘墓(特定集団墓)の検出、および周囲地形から「王墓」自体が特定個人の墳丘墓と推定されている。さらに、須玖岡本遺跡群と雑餉隈丘陵の間の低地部では、弥生時代初期から後期末までの水田関連遺構(水田面、水路など)が検出され、この地域が早くから広く水田開発されていたことが判明しつつある。須玖岡本遺跡群の生産域と考えられるが、雑餉隈丘陵の弥生時代集落もその経営と無関係ではないだろう。

以下は弥生時代から古代までを説明する。縄文時代晩期末＝弥生時代早期(突帯文期)には、雑餉隈15次において、夜臼II式期(SR003木棺墓など一部板付I式併行か)の木棺墓群が営まれた(第868集)。有柄式磨製石剣や有茎式柳葉形磨製石錐を伴う木棺が計3基検出され、当時この地に新しい水稻農耕文化をもたらし



た指導者たちの墓群であろう。その北150mの雑餉隈5次地点では、時期がやや新しいが（一部に板付I式があり、15次と僅かに重なるか）、前期中頃～後半（板付IIa～IIb式）の堅穴建物、土坑、方形周溝造構からなる集落があり、武器などを製作した石器工房が伴う（第569集）。この近隣に15次の木棺墓群と同時期の、対応する居住域が存在すると推定される。前期では、麦野Aにも板付IIa～IIc式の貯蔵穴が分布し、住居遺構は不明確だが集落が存在するとみられる。中期は、雑餉隈5次に須玖II式古相の堅穴建物があり、同2次（中ノ原1次）には須玖II式新相の井戸（SK002）がある（第409集）。中期後半～末の集落は雑餉隈遺跡中央から北部から中ノ原遺跡北部での分布が推定される。ただし現状では、雑餉隈丘陵での中期初頭～前半の遺構分布が不明である。後期初頭～前半については、麦野C5次に堅穴建物群がある（第643集）。小規模な集落の広がりであろう。後期中頃には南八幡5次で堅穴建物が確認され、在地受容化初期の瀬戸内系高坏が出土している（第441集）。麦野Cからの集落移転が考えられる。その後、後期後半から古墳時代前期前半まで集落が継続する。特に南八幡9次では、後期後半古相の2号住から古墳前期（IIb～IIc期）の32号住まで継続している（第641集）。5号住（古墳初頭=IIA期）では「カマド」が



壁面中央にあり、2号住の68点を筆頭に計95点のガラス小玉（1点管玉）が出土し、また2号住からは辰砂小塊が出土するなど特異な様相を示し、集落の中心域であろう。砥石の出土が目立ち、未報告だが鉄器未製品や小鉄片が出土しており、鍛冶工房があった可能性がある（比佐陽一郎氏教示）。本報告の17次は9次地点から続く集落域の末端であり、その北側には南西から小谷が入り込む旧地形があった。南福岡駅前の確認調査地点（図2の「A」）は谷部中央であった。この谷を挟んだ北側でも、5次（後期中頃）、12次（後期後半？）、15次（終末期～古墳前期前半）、19次において当該期の遺構・遺物が確認されている。15次SC09（II C期）では、東日本系の台付壺が出土している（第1007集）。さらに遺跡東部縁辺では、かつて鉄道敷設や鉄工所建設時に、中山平次郎が遺構・遺物を記録したエリアがある（図1の「0」、JR線路域西側、現・ホームセンター敷地）。当時の図面から（文献は図1説明参照）、古墳初頭の在地系壺が伴う石蓋土壙墓があり、もう1基の石蓋土壙墓も記録される。また、1基以上の大型壺棺（墓地）があったという。すなわち、中期の壺棺や後期から古墳前期前半までの集団墓地が存在したと考えられる（その後、市教委による事前審査でこの土地の試掘調査が行われたが、以前の鉄工所建設による造成のためか、遺構は完全に削平されていた）。現在の分布図では、この区域は南八幡遺跡に含まれないが、本来は含まれるべきである。中期の壺棺の報告もあり、遺跡北半の何処かに中期の居住域も存在するのであろう。以上のように雑餉隈丘陵では、弥生早期から古墳前期前半まで（中期初頭～前半のみ不明）、丘陵域のどこかに各時期の集落域が存在し、時期により移動していた様相が分かる。特に後期中頃から古墳前期前半までの集落域は南八幡で連続し、その集団墓地（墳墓域）として中山平次郎の報告地点が考えられる。また中期の集落も南八幡に存在する可能性がある。

古墳前期後半～中期前半は南八幡の一部（1次SD01、9次SC04覆土高坏）にあるのみで、須恵器出現以降、後期（～TK43=III B期）までの遺構は雑餉隈丘陵にみられない。次の飛鳥時代（TK209=IV期前半以降）には、南八幡2・3次に集落が一時形成されるが（IV期）、あまり広がらない。麦野A西側の井相田Cでは、後期から集落が継続し、須玖岡本遺跡群周囲でも同時期に遺構が増加する。しかし南八幡では7世紀後半（IV期末～VI期）の遺構が無く、井相田Cや須玖岡本周囲では集落が継続し、須玖岡本では初期瓦を伴う廐寺や官衙が想定される様相とは対照的である。奈良時代になると、雑餉隈丘陵で遺構（堅穴建物、掘立柱建物、土坑、井戸）が再出現し、増大する。堅穴建物の重複が激しい地点や、数十棟以上が検出された地点もある。厳密には、遺構群の出現は奈良時代初頭だが、その増大は8世紀第1四半期末頃からである。これは、大宰府政府II期の成立や古代官道造営期に合致する。雑餉隈9次では方形に配置された8世紀後半の複数の方形土坑を伴う大型掘立柱建物があり、下位ランクの官衙であろう（第570集）。麦野A 7次では、8世紀後半の方形区画溝と方形柱穴列に門柱を伴う、さらに上位の官衙遺構が検出されている（第867集）。しかし平安時代初めには雑餉隈丘陵の遺構が激減する。麦野Aのみは9世紀以降も遺構・遺物が継続するが、他はほとんどない。ただし南八幡4次の建物群はこの時期も含む可能性がある（第277集）。



Ph. 1 I区遺構検出作業状況（北西から）



Ph. 2 II区遺構検出作業状況（南から）

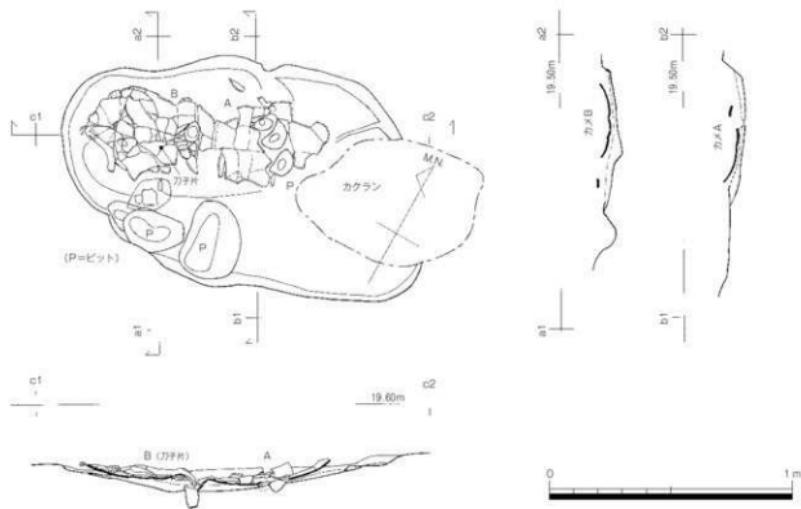


図6 ST01斎棺墓平面図・断面図 (1/20)

II. 調査の記録

1. 調査の概要と経過

本調査地点は、南八幡遺跡の中央よりやや南側にあたる（図1・2）。周囲の標高は、19.7~20.4mであるが、おおむね東側が高く、西側が低い。調査区の東側の確認調査試掘トレンチ（「調査に至る経緯」参照、18次調査地点）ではGL-160cmで地山となることが確認されているように、古い微地形は西側に小谷が入り、東側がやや高くなる地形であったようである。

調査は、廃土処理の都合上、2区に分けている（図3）。東半分のI区では、東側でGL-40~50cmで鳥栖ローム地山上面となるが、西半分のII区との境界ではGL-100cm前後、II区の西側ではGL-140cm前後で鳥栖ローム地山上面となる（図4）。ただし、II区西側の断面観察では、ローム地山の上部に黒褐色シルトの古い包含層（黒ボク層か）が薄く残っていることが確認できた。遺構はローム地山上面で確認しているが、本来はその黒褐色シルト層上面から掘り込まれていたようである（図4-土層08・09、PL.9-1~5、PL.2-2）。黒色系土層への黒色土遺構の掘り込みのため、重機による表土掘削時には気が付かなかったが、今後、周囲遺跡における谷部の調査時には注意すべき点となろう。

I区は、遺構密度が薄く、弥生時代後期後半~終末期の斎棺墓と、黒褐色~暗褐色の柱穴を若干検出した。柱穴は、土器小片から弥生時代が主体で、一部古代であろう。2本主柱の堅穴住居（弥生時代後期か）が削平されたとみられるものがある。斎棺墓の遺存度から、かなりの削平を受けている。堅穴住居の貼床もほとんど残っていないので、本来の当時の地表から1m近く削平されていると想定できる。I区南西隅から西側のII区では、明確な柱穴もあるが不明確なビットを含むビット群が、幅4mの範囲で南北に連なって検出されている。多くは黒褐色土覆土であり、複数のビットに弥生土器片が認められたことから、地形変換線に営まれた構列群の可能性がある。ただし、ビットの様相から全てが人為的掘削遺構ではなく、特に小規模なもの

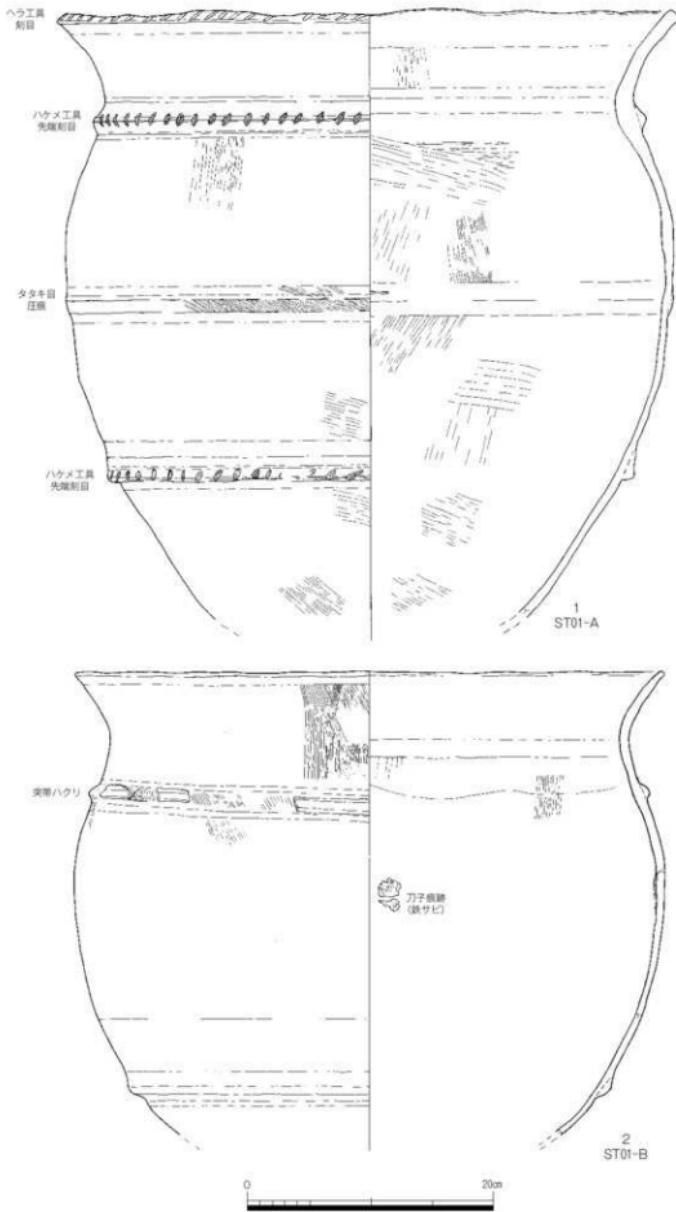


図7 ST001櫛棺実測図 (1/4)

のは植物痕なども含むとみられる。本調査では、その区別がすぐにはできないので、全てを掘削した。ピットの一部には奈良時代の須恵器・土師器小片もあり、その時期の遺構もあるとみられる。また一部に竪穴建物（竪穴住居）の貼床や壁周溝の痕跡とみられるものがあった。

全体として出土遺物は少ないが（パンケース2箱程度）、甕棺を含む弥生土器（弥生時代後期～終末期が主体、古墳時代前期の古式土師器を僅に含むか）の破片が主体で、一部に奈良時代前後の土師器・須恵器の破片がある。表土層（盛土層・旧耕作土層）からは中世から近世の陶器片等も出土している。その他、甕棺から鉄製刀子片が出土し、また表土層からの出土だが、耳環状の環状青銅製品（鍍金か？）が1点検出されている。

今回の調査では、主に弥生時代後期後半～週末前後の集落と墓地の一部を検出した圃（北東側の8次、北西側の2・3次）の成果から、奈良時代の遺構の分布を主に想定していたので、やや意外な結果となった。

現地における本調査は、平成10月8日に調査区東側（I区）の表土を重機で掘削することから始めた。10月9日に発掘調査機材を搬入し、現場テントを設営し、遺構検出の開始（Ph. 1）、攪乱の掘削など、本調査を本格的に開始した。本調査においては、水道を設置することができなかつたが、共同住宅建設予定業者の協力により、調査に必要な水は現地にタンクが置かれ、随時運搬していただいたので、滞りなく作業をすることができた。10月13日にI区遺構検出状況を清掃し、撮影した（PL.1-1）。10月14日に「SX001」が甕棺墓（ST001）であることを確認した（PL.5-3・4）。翌15日にST001甕棺墓の出土状況を清掃し撮影した（PL.5-5、PL.6-1・2）。10月16日には、I区の主な柱穴の半裁状況写真を撮影した（PL.7）。なおこれら柱穴の半裁土層は、写真メモだけで土層図は残していない。10月21日には、I区遺構の掘削を終えたので、全体を清掃し、I区の全体写真を撮影した。また、個別の遺構写真を撮影した。同日までに、I区の遺構実測を終了している。

10月22日から23日にかけて、重機による反転掘削（I区埋め戻し→II区表土掘削）を行った（PL.8-1）。10月27日より、II区の作業を開始した。II区は遺構検出面がI区より深くなつたこともあり、斜面養生シートの固定と廃土置場の土留めのため、多量の土嚢を作る必要があった。また同日より、II区の遺構検出を開始し（Ph.2）、壁面の清掃を行つた。翌28日にII区遺構検出状況を清掃し、撮影した（PL.2-2、PL.2-1、PL.8-2～4）。その後遺構の掘削を行い、10月30日に主なピット（柱穴等）の個別の遺構写真を撮影した。11月4日までに遺構をほぼ掘削し、同日に全体を清掃し、II区の全体写真を撮影した。11月5日に、個別以降の補足写真を撮影した。11月6日には、調査区壁面を再精査し、土層状況の写真を撮影した。II区は、比較的小さいピットがほとんどであるが、その数が多く、遺構平面図作成とレベル入れの実測作業に若干の手間を要した。調査終了間際の11月10日に大雨があり、翌11日に水抜きや崩落箇所の復旧を行つて、残つてた図面（平面図の一部と壁面土層図）実測を行つた。11月12日の朝に記録作業を終了し、設営テントや発掘機材等の撤収を行い、平行して重機による埋め戻しを行つた。同日中に埋め戻しと整地を終了し、委託者側に調査地を引き渡して、本調査を終了した。なお出土遺物の洗浄は、遺物量が比較的少なかったこともあり、本調査期間中に現地にてほぼ全てを終了することができた。

2. 基本土層と遺構の分布（図3・4）

「調査の概要」で述べたように、17次調査区ではI区からII区へ遺構検出面が下がつておらず、またそれは現在の周囲標高にも多少反映している状況である。I区からII区の南東側までは遺構の削平が著しい。調査区壁面の土層を見ると（土層01～05）、地表以下はほとんど近現代の盛土であり、遺構検出面のトスローム直上にロームの再堆積層があるが、これもおそらく近世以降の整地によるものであろう。少なくとも近世までに、全体的に旧地形の削平がなされたと考えられる。

次にII区であるが、I区からII区への地山ローム上面は、東から西へ傾斜している。この略南北方向の緩

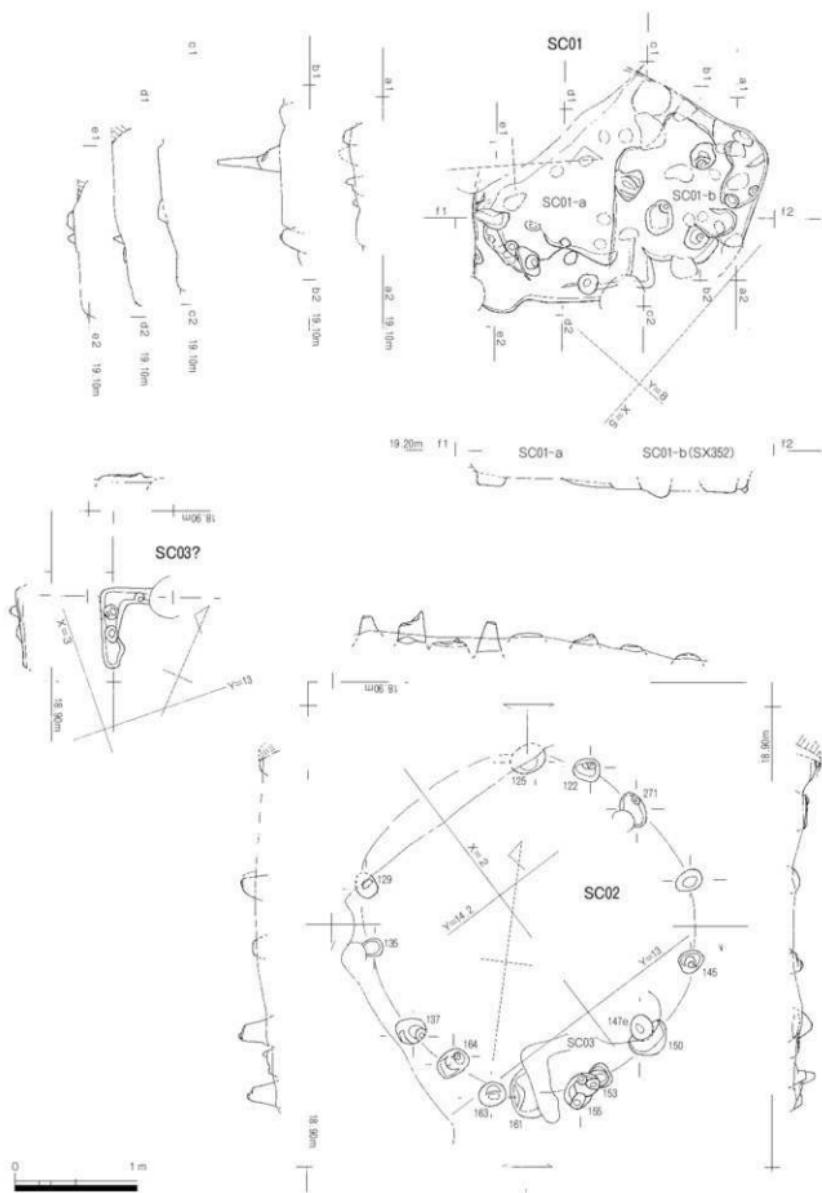


図8 積穴建物(SC)およびその可能性があるもの(1) (1/40)

斜面の幅4m前後にピット群が集中するが、この斜面および、調査区北西隅から北隅でローム上面が最も低くなる範囲まで、地山ロームの上部に、黒褐色シルト層が堆積している（土層08・09、PL.4-2、PL.9）。この層は基本的に無遺物層であり、調査区壁面の土層観察では、ピットの多くはこの層を切っているから、時期は不明であるが古い自然堆積層（「地山」上部）である。遺構検出面は、「黒に黒」で遺構検出がやや難しくなるが、この範囲ではこの上面で行うべきであった。この黒褐色シルト層の上部に近世の陶磁器までを含む再堆積土なし盛土がある（土層08・09の4層、15層）。これより上は近現代の盛土である。谷部の埋め立て・整地のような行為が近世以降に行われたようであるが、ピット群の遺構深度は全体として斜面下方（Ⅱ区北側）はやや深く、南東側に向かって浅くなる傾向があるものの、最も深くなる北側でも、本来の遺構上面であった黒褐色シルト層上面から測ってもそう深いものではないので、斜面下方のピットも本来の深さではなく、近世の埋め立て・整地の前に斜面下方に自然堆積している黒褐色シルト層の上部も削るような全体的な削平があったとみられる。

黒褐色シルト層は、南側ないし南東側にかけて薄くなり無くなるので、I区の遺構の遺存度を考慮すると、I区で二本柱竪穴建物や甕棺墓が営まれた時期の地表面と（現遺構検出面プラス100cm程度か）、II区北側の谷部斜面下方黒褐色シルト層上面の本来のレベル差は、現在は約90cmだが（前者が標高19.6m、後者が18.7m）、後者の黒褐色シルト層が多少削平されているとしても遺構の遺存度からI区ほどではないと思われる（II区北側でプラス40cm程度か）、推定1.5mの比高差があったと想定される。一方、II区のピット群が集中する斜面の遺構深度は、斜面上方の南・東側が深くなっているということはないので、建物や柵列状遺構を想定しているが、もともと斜面であったところに柱穴などが営まれたとみられる（一部のピット群は植栽のような痕跡の可能性がある）。これらピット群は北側の18次調査区北東側にもみられ、等高線とは必ずしも一致しない方向（略南北方向）で、ほぼ同様の幅に集中するので、17次調査II区と同様の、柵列や小規模な掘立柱建物などの人為的遺構が含まれるとみられる（ただし調査者は自然遺構が大部分と判断している）。（注：18次調査は2010年度実施で、「福岡市埋蔵文化財年報」VOL.25に報告収録）。

II区北側の最も低くなる部分で、今回遺構検出面としたストローム上面は標高18.7m前後である。北側隣接地（もと同一地番敷地）の18次調査区では（図3）、遺構検出面をローム上面とし（17次II区と同様に上部に黒ボク状の黒褐色シルト層があった）、18次東隅でローム上面が18.7mであるが、同調査区北・西側にかけて低くなり、調査区北側から北西側では18.2m前後のようである。

3. 遺構と遺物

（1）甕棺墓（ST）

・ ST001甕棺墓（図6、PL.5-3~5、PL.6-1~3）

I区中央西側で検出した。検出状況は、甕棺の両側面が削平で輪切りにされたようになっており、甕棺内部には上部からのローム土主体再堆積層が流入しており（PL.1-1の中央やや右参照）、内部まで攪乱されているような状況であり、墓壙にも攪乱がおよび、とくに東側に攪乱の掘り込みがある。

甕棺本体は、甕形土器2個体から構成されるが、いずれも墓壙底面側付近しか遺存せず、両個体とともに底部が欠損していた。底部の欠損により正確な全長は不明だが、上下棺合わせて約105~110cmほどあったとみられる。東側の棺を甕A、北側の棺を甕Bとした。甕Aの方が土器としてはやや大きく、また密着している墓壙底のレベルが甕Bよりも低いが、次に述べる墓壙全体の形状から、こちらが「上甕」とみられる。甕Bは甕Aよりもやや小さく、かつ密着している墓壙底のレベルが甕Aよりもや高いが、こちらが墓壙の「奥」に先に置かれたとみられ、「下甕」とみられる。副葬品が出土したことでもこの見方の傍証となる。

墓壙は甕棺本体の周縁以外にも、甕棺主軸（N-66°-E）より少し東に傾いて広がっており、その東側は浅くなっている。検出面で、長軸が東西1.6m、短軸が南北1.0mの不整規円形墓壙である。小規模な甕棺で

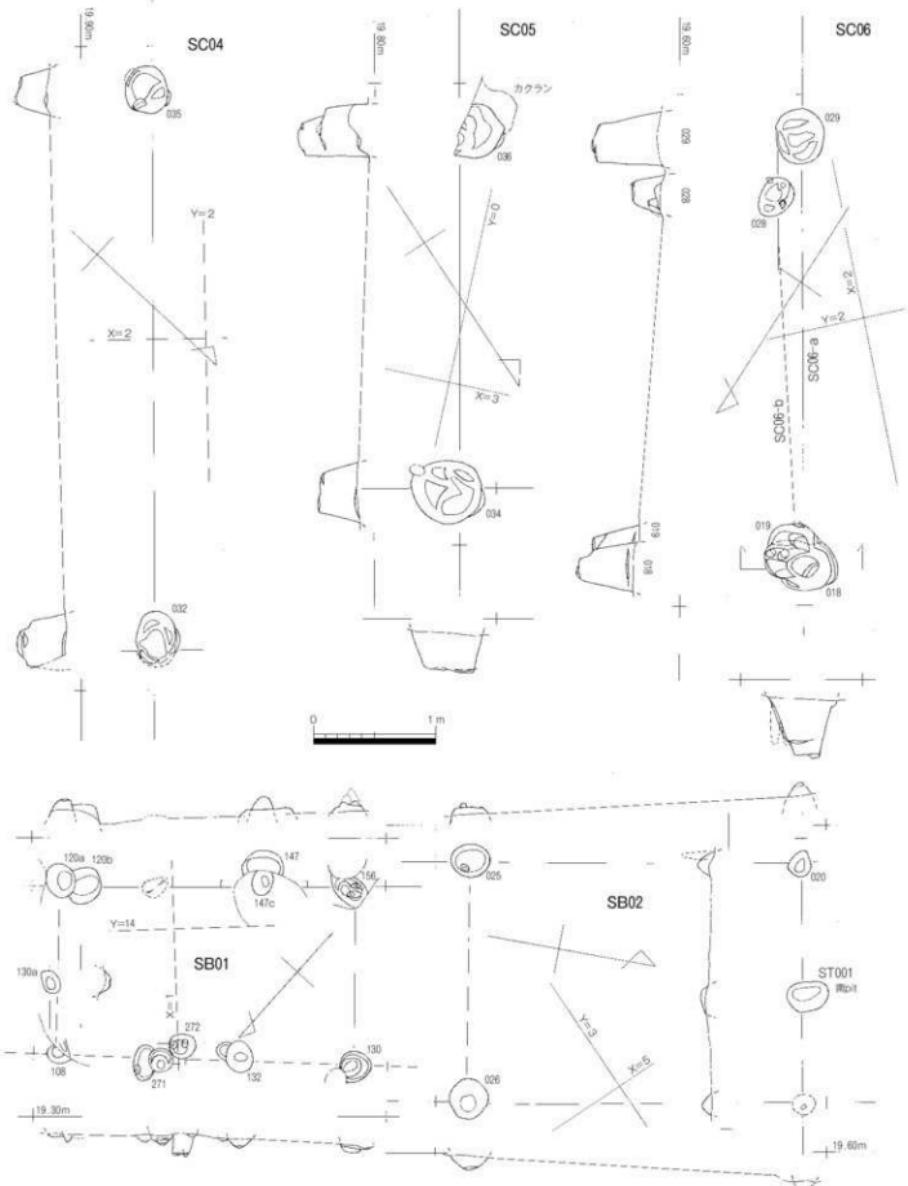


図9 竪穴建物(SC)およびその可能性があるもの(2)、掘立柱建物(SB)(1)(1/40)

あるが、その割に本来の墓壙は意外と大きく、深かったとみられる。壺棺の墓壙への搬入は、段状掘方となっていたであろう東側から行われたとみられる。後期前半以降の壺棺自体少なくなるもので、小児または非成人用壺棺のサイズでありながら、刀子だけではあるが副葬品があったことからも、集団の中の特定の上位階層に属する被葬者が考えられる。

墓壙掘方を完掘したが、壺棺以前に小柱穴があったようである(PL.6-3)。墓壙内の他のピットは、壺棺との前後関係が不明確である。

埋葬遺構は調査区内では他に検出されていない。周囲の弥生時代後期集落が検出されている地点(5次、9次、15次など)でも、同時期の埋葬遺構が無く、やや異例である。壺棺の規模から、非成人埋葬(小児壺棺)の可能性が高く、周囲の遺跡例でも弥生時代後期から古墳時代初頭では、小児壺棺など小規模埋葬遺構が集落居住域中に単独に近い状況で存在することがあるため(比恵遺跡群など)、同様の例であろう。

・出土遺物

・壺A(図7上、PL.12-1・2)

遺存状況が悪く復元値となるが、口径49cm、頸部径43cm、胴部最大径49.4cm、残存高49.5cm、推定器高57.5~58cm前後となる。口縁部はやや波打つ感じの粗い作りで、端部は斜めに面取りし、ヘラ状工具で連続的に刻目を施す。頸部突帯は断面が三角形に近いシャープでない台形であり、頂部にはハケメ工具(板)の先端で刻目を施す。胴部中位の突帯は著しく扁平で、粗いハケメもしくはタタキ工具の刻目を押圧している。胴部下位の突帯は、下方に垂下したような断面三角形に近い台形突帯で、ハケメ工具先端による刻目を施す。頸部突帯と同様である。同時期の在地系複合口縁壺の胴部下位突帯のあり方とはほぼ同じである。底部は欠損しているが、類例から、不安定な平底の名残がある小凸レンズ状底か尖底であろうが、丸底に近い可能性もある。

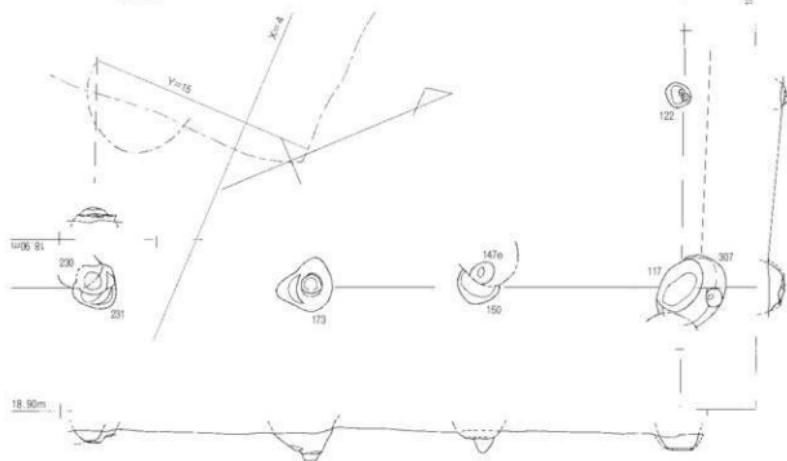
調整は、器表面が磨滅して不明瞭だが、およそ以下の通りである。外面調整は、口縁部はタテハケ(磨滅して不明瞭)後ヨコナデ、胴部上半はハケメで、先にタタキがあった可能性がある(中位突帯上部に痕跡)。胴部下半はナナメ(左上)ハケである。突帯の上下はヨコナデを施す。内面調整は、口縁部がタテハケ後ヨコナデ、胴部上位はナナメハケ後に頸部下にヨコハケ、頸部突帯裏側はヨコナデ、胴部上位から中位はタテハケないし右上ナナメハケ、中位突帯裏側はヨコナデ、胴部下半はタテハケ(下半上位は左上ハケ)後にヨコハケないし右上ハケメで、下位突帯裏側はナデが施される。外面に、口縁部の一部と中位から下位にかけて大きめの黒斑がある。他の色調は、外面が浅黄橙色で一部赤変しているところがあり、内面が灰褐色である。壺Bより淡く明るい色調である。胎土には、0.5~1.0mm前後の花崗岩、長石、石英の砂粒をやや多く含む。

・壺B(図7下、PL.12-3-4)

壺Aと同様の状況で復元値となるが、口径47.2cm、頸部径42cm、胴部最大径47.9cm、残存高37.8cm、推定器高48~48.5cm前後となる。口縁部はすばめる感じである。頸部の屈曲は壺Aに比べ曖昧である。頸部突帯は、もっとも括れる部分よりやや下方にあり、低い台形を呈する。剥離している部分が多い。胴部中位に突帯は無く、下半部につぶれて三角形に近くなった低平な台形の突帯が廻る。同時期の複合口縁壺によくある位置にある。壺Aと異なり、いずれの突帯も刻目がない。底部は欠損しているが、全体に丸みを帯びた胴部形態なので、尖底にはならず、不安定な凸レンズ底か丸底に近いものであろう。

外面調整は、口縁部から頸部にタテハケが残るが、胴部は磨滅して不明である(タテハケが一部僅かに残る)。口縁部端や突帯貼付け上下がヨコナデである。内面調整は、頸部前後にタテハケが残るが、全体に磨滅して不明である。おそらくハケメ後ナデである。口縁部と頸部内面は、不明瞭だが断続的なヨコナデである。胴部内面中位付近(肩部内側)に鉄刀子の鏽痕跡が残る。全体に器壁がやや薄い丁寧な作りである。

SB03



SB04

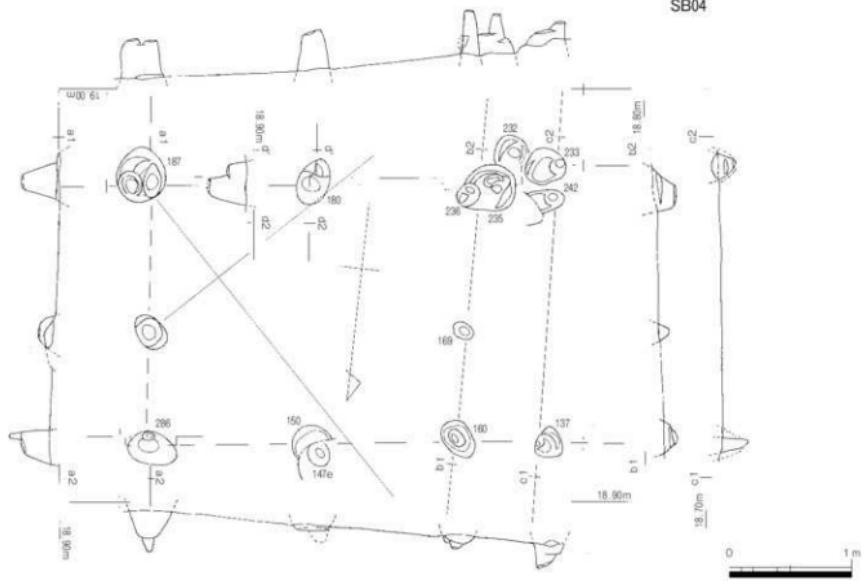


図10 据立柱建物(2) (1/40)

外面に、口縁部から胴部中位にかけて帯状の黒斑がある。他の色調は、外面が黄橙色から橙色、内面が橙色から赤褐色だが、口縁部内面は外面に近い黄橙色気味となる。胎土には、花崗岩、長石、石英の砂粒(0.5~1.5mm)をやや多く含む。

以上、甕A・Bともに底部が不明であるので不確定要素は残るが、胴部形態（胴部最大径が口縁部径の前後となる）の日常土器甕との比較や、頸部から胴部の突帯の諸特徴から、おそらく弥生時代終末期（IA~IB期）、さらに絞れば編者の編年（註）の「IB期」である可能性が高い。ただし、甕Aの中位突帯がほとんど厚みのない扁平なものであることから、底部の形状によっては古墳時代初頭（II A期）に下る可能性は否定できない。

（註）久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究」XIX)

・鉄製刀子（図15-2）

「下甕」とみられる甕Bの肩部内から出土した。切先と柄部が欠失し、想定長の約1/3~1/4程度の遺存とみられる。遺構検出面まで上位層からの攪乱が及んでいたためとみられる。位置的に、甕Bを「下甕」とするならば、被葬者の左脇腹付近に下げていたものか。残存長33mm、残存部の刀身幅は11~13mm、厚み2mm前後である。布痕や木質（鞘）痕跡は無い（不明である）。

（2）竪穴建物（住居）およびその可能性のあるもの（SC）

南八幡17次調査では、明確な竪穴住居（竪穴建物）を検出できていない（「竪穴住居」は全てが「住居」とは限らないので、以下「竪穴建物」とする）しかし、竪穴の貼床の遺存とみられる範囲や、柱穴の組み合わせから「二本柱」しかありえず、弥生時代後期から古墳時代初頭頃までよくみられる長方形二本柱主柱穴の竪穴建物が貼床まで削平されて主柱穴のみ遺存したと思われるもの、また竪穴建物の壁周溝の遺存と思われるものを、この項に含めて報告する。合計6棟を推定復元したが（図8・9）、確実なものではない。しかし、それらの可能性を提示しないと本遺跡の集落論に空白が生じてしまうため、あえて報告するものである。

・SC01（図8上段、PL.6-1、PL.11-2・3）

遺構検出時に地山が汚れているような妙な状況であったため精査したところ、ロームにぶい橙色土に褐色・暗褐色の汚れ土を含む埋土の遺構であり、状況から竪穴建物の掘方（貼床）の遺存と判断した。「貼床」の最大深度は12cmまでである。なお本調査中に「SX002」（I区側）としていたものを整理し（「SX001」はST001とした）、この遺構は反転後にII区側にも続きがあり、こちらは「SX352」としつつ、I区検出「SX002」の連続とみて整理したが、図面を合成して検討すると、プランから結論的に2つの方形状竪穴の重複の可能性が認められる。I区側を「SC01-a」、II区側を「SC01-b」としている。両者の前後関係は不明確である。

SC01-aは、N（磁北）-5°-E、南北1.5m、東西1.2m以上であるが、この規模は掘方遺存範囲であり、本来の遺構規模ではない。ただし、一回り大きいとしても小規模な竪穴建物であったと思われる。SC01-b（SX352）は、N-34°-E（西辺を基準）、南北1.7m以上、東西1.2m以上である。規模は同様に本来のものではないが、一回り大きいとしても小規模な竪穴建物の一部であろう。いずれの竪穴痕跡も、主柱穴が無いようである。近隣（南八幡遺跡ほかの雑耕隈地区）の遺跡群における竪穴建物の様相を見ると、弥生時代後期から古墳時代初頭のものは主柱穴が比較的明確なものが多いが、飛鳥～奈良時代の竪穴建物には主柱穴が無いか、不明確なものが少なくない。特に小規模なものはその傾向が強い。したがって出土遺物は無いものの、奈良時代の竪穴建物の可能性を認めておきたい（近隣の2次、3次では飛鳥時代前半の竪穴建物があるが、他は奈良時代のものが大部分である）。

・SC02（図8下段、PL.11-1）

II区北側で推定した、円形の柱穴列。径2.6m×2.8mで、円形住居とすれば壁の位置は一回り外側であるから、径3.5~4mのものであろう。ピットは不揃いでかつ何れも小さく浅いが、基本土層の項で述べたよう

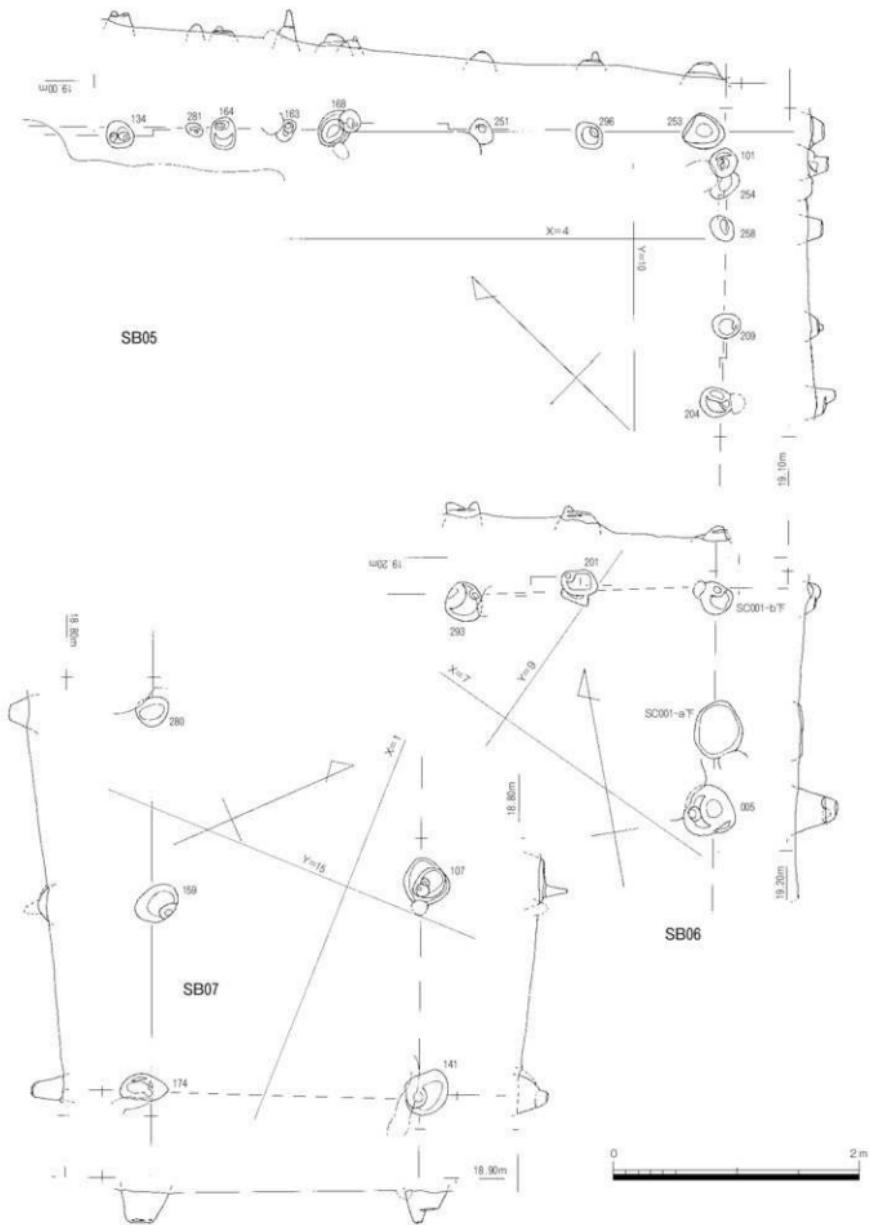


图11 挖立柱建物(3) (1/40)

に、この部分ではプラス20cm上に本来の遺構検査面があったはずなので（黒褐色シルト層上面）、それを勘案する必要がある。黒褐色シルト層上面の遺存も、本来の地形から若干削平されているとみられるので、中央土坑がないのは、削平の結果とみられる。ただし、円形住居であれば弥生時代前期～中期末までの所産となるが、調査区内および南八幡遺跡内ではその時期の遺物が全くみられないのが問題として残る。しかしながら周辺遺跡では、南八幡遺跡南側の雑耕腰遺跡で弥生時代前期の集落や、一部中期後半の堅穴建物や井戸が検出されているので、可能性が無いわけではなく、今後の周囲調査事例による検証にかかっている。

・SC03（図8中段左、PL.10-2、PL.11-1）

L字状に曲がる小溝で、溝底に小ピットがあり、堅穴建物の壁周溝の隅角がやや深くなつて遺存したものである可能性ありとしてあげる。ただし、斜面上方の南側に対応する小溝や小ピット列が無いため、堅穴建物の一部とするには弱く、単に屈曲する区画構列の一部が布堀状になっているだけかもしれないものである。0.66m × 0.43mの遺存。南北辺は、N-22.5°-Wである。

・SC04（図9上段左、PL.2-1、PL.5-1・2）

I区南東側で検出した。南側に柱構成が折り返す可能性は皆無ではないが、ここでは弥生時代後期から古墳時代初頭までに通有な、二本柱主柱の長方形堅穴建物が削平されたものと考える。柱間は芯々4.6mで、両外側にベッド状遺構があれば長軸7～8mの長方形堅穴建物を想定しうる。柱主軸方位はN（磁北）-46°-Wである。SP035からは弥生時代後期後半～終末期の壺形土器の底部片が出土している（図14-6）。柱穴覆土も黒褐色土主体で（PL.7-1・2）、弥生時代のものとしてよいだろう。

・SC05（図9上段中、PL.2-1、PL.5-1・2）

I区南側で検出した。南側に柱構成が折り返す可能性は皆無ではないが、ここではSC04と同様に、二本柱主柱の長方形堅穴建物が削平されたものと考える。柱間は芯々3.0mで、両外側にベッド状遺構があれば長軸5.5～6m前後の長方形堅穴建物を想定しうる。柱主軸方位はN（磁北）-33°-Wである。SP034からは弥生時代後期中頃～後半の甕（鍋）形土器胴部上半片が出土している（図14-3）。柱穴覆土も黒褐色土主体で（PL.7-3・4）、弥生時代のものとしてよいだろう。なおSC05は、SC04と重複関係にあったはずだが、柱穴の小破片での比較がどこまで有効か不明だが、SC05→SC04の順序の可能性を指摘できる。

・SC06（図9上段右、PL.2-1、PL.5-1・2）

I区北東側で検出した。東側に柱構成が折り返す可能性は皆無ではないが、ここでは上記と同様に、二本柱主柱の長方形堅穴建物が削平されたものと考える。2棟の重複とみられ、SP029とSP018をSC06-a、SP028とSP019をSC06-bとする。SP019→SP018なので、SC06-b→SC06-aとなる。SC06-bの柱間は芯々約3.1mで、両外側にベッド状遺構があればSC05と同様の規模が想定される。柱主軸方位はN（磁北）-36°-Eである。SC06-aの柱間は芯々3.6mで、両外側にベッド状遺構があれば長軸6～6.5m前後の長方形堅穴建物を想定しうる。柱主軸方位はN（磁北）-33°-Eである。何れの方位もおよそであるがST001甕棺墓の方位にはほぼ直交し、同時存在かどうかは不明だが、時期が近い可能性があろう。SP028からは弥生時代後期後半～終末期の壺形土器胴部下半片が出土している（図14-4）。柱穴覆土はややばらつきがあり、SP018は黒褐色土主体だが（PL.7-5）、SP019は暗褐色土とロームブロックを多く混入し（埋戻しが）、SP028は黑暗褐色土、SP029は黒褐色土主体である。古い柱穴の方が、色調がやや淡く褐色気味であるのは、当時の周囲集落の表土の有機土壤の発達度合いの差であろうか。いずれにしても弥生時代のものとしてよいだろう。

以上、SC04～SC06については、調査区内で類似した柱穴の組み合わせが他にない、という理由と、遺物の時期の傍証から、弥生時代後期から古墳時代初頭までに通有な、**二本柱主柱の長方形堅穴建物が削平されたもの**と考えた。このような状況は、他の周囲遺跡の調査でもあると思われる。実際、編者が調査・報告を行った、席田青木遺跡3次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第534集）や、比恵遺跡群100次調査（同第956集）でも、同様に推定した遺構がある。今後、あるいは既往の調査事例においても、削平が顯著な場合、そ

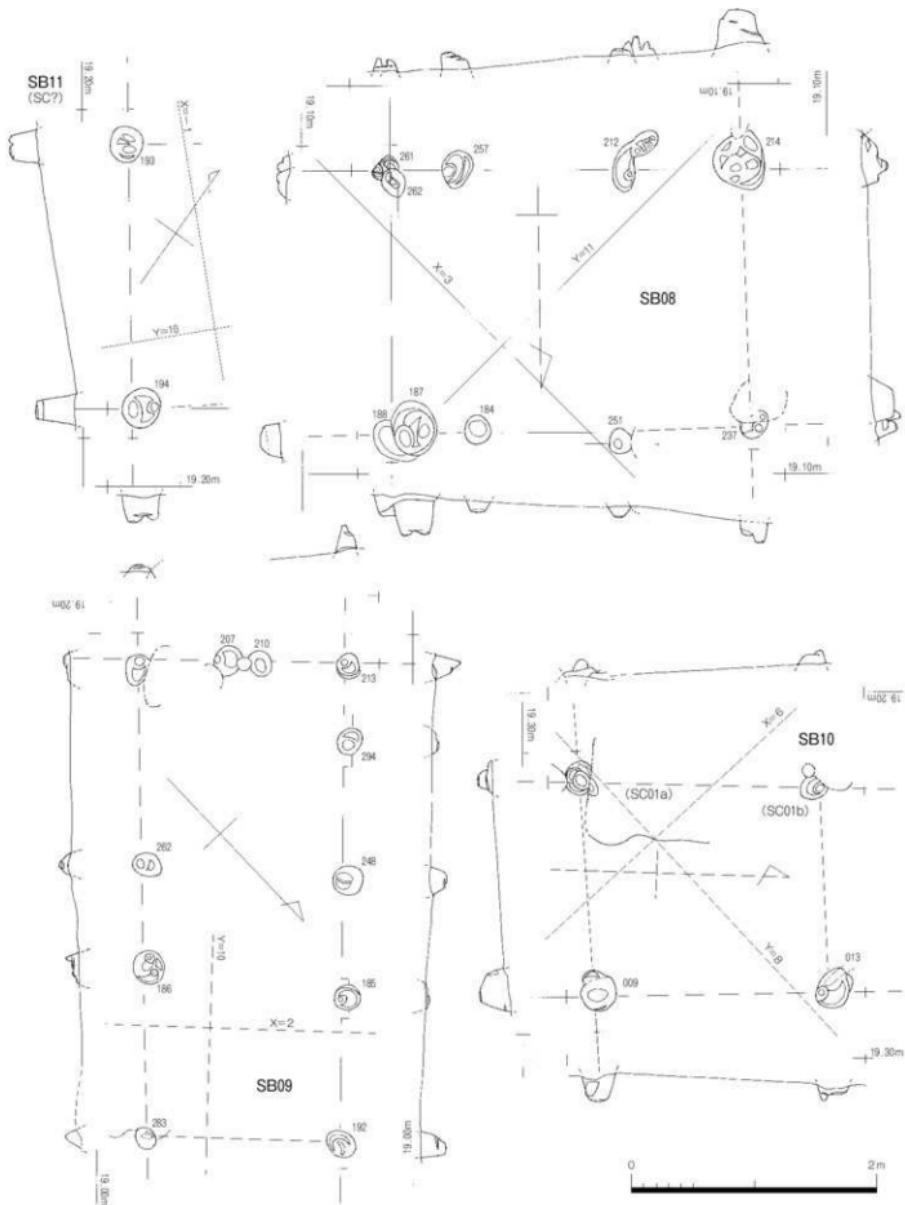


図12 掘立柱建物(4) (1/40)

のような視点が必要であろう。

(3) 堀立柱建物および柱穴列遺構 (SB) (図7~13)

本調査時においては、特にⅡ区において多数のピットを検出したが、現地での建物復元はあまりできなかつた。しかし、現地でも幾つか揃って並びそうだという柱穴列は認識していた。整理作業過程で、有意な柱穴の並びと組み合わせを抽出したので、それらを提示する。なお、柱穴の覆土の大部分は黒色から黒褐色土で、一部は暗褐色土、暗灰褐色土である (PL.3-1, PL.8-2~4参照)。なおⅡ区北半検出の柱穴は、「基本土層」の項で述べたように、本来はもう少し上の黒褐色シルト層から検出されるべきものであったので、結果的に削平して検出した結果である。Ⅱ区南半より南側は検出以前から削平が進んでいる状況である。以下の建物の柱穴について浅く径が小さいと感じられるかもしれないが、そうした検出状況を勘案する必要がある。

・SB01 (図9下段左)

Ⅱ区北側で検出。梁間（短軸）1間×桁行（長軸）3間と思われるが、東辺は一部不明確。北辺は東柱があるか (SP130a)。1.4~1.45m × 2.5m。長軸方位はN (磁北) - 50° - E。SP120より弥生時代後期終末の壺形土器破片があり (図14-1)、その時期か。

・SB02 (図9下段右)

Ⅰ区西側で検出。梁間1間×桁行1間。梁間は北辺のST001墓壙を切るピットが伴えば2間となるが対応する南辺中央は検出できていないので、浅い東柱的なものか。1.95~2.0m × 2.75m。長軸方位はN (磁北) - 10° - W。弥生時代終末期の壺形土器ST001をおそらく切ると思われ、時期が離れた (飛鳥～) 奈良時代の集落時に伴うものか。

・SB03 (図10上段)

Ⅱ区北側で検出。確定なのは東辺3間分。梁間は北西側の調査区外に折り返すと想定しているが、北辺とするSP122が小規模で不確実。あるいは、南北に延びる区画の柵列的な柱穴列の可能性もあり、南側は延長上にSP221またはSP222がある。北側は延長上にSP114があるが、柱間が狭すぎ、また重複関係に矛盾が生じる。調査区外に延びるとすれば柱間が開きすぎるので、SP117 (SP307) で終わるか西側に折り返すかであろう。柱間は東辺3間が4.9m、延長上のSP221・SP222が伴うなら6.2m。方位はN (磁北) - 22.5° - E。弥生時代の集落に伴う可能性があると考えているが、根拠は薄い。ただし、奈良時代の可能性があるSB04と重複関係にあり、切られていると考える。

・SB04 (図10下段)

Ⅱ区中央～北西側で検出。梁間2間×桁行2間または3間と考えるが、桁行方向は梁間SP235~SP160 (A列) とSP233 (またはSP242) ~ SP137 (B列)までの両者があり、少なくとも桁行南辺のうち東側2柱穴 (SP187・SP180) は柱痕跡が2つあり、建物が建替重複している可能性がある。桁行の長いB列の長さは3.8~3.9m、短いA列までは2.65m、梁間は2.2~2.3m。方位は、N - 82.5~85° - Eで、奈良時代前後の遺構群の方位に近く、奈良時代と想定しているSB08の柱穴をSP187が切るので、これも古代の建物である可能性が高い。

・SB05 (図11上段)

Ⅱ区中央～北西側で検出。長辺は5間分 (SP163, SP281は軸上に載るがピットが小さく柱間が狭くなるので間数から除外)、南側の短辺は3間分 (同様にSP254は除外) の確認。長辺の北西側への延長は不明だが、短辺は南西側に延長するピットもしくは北西側に折り返すピットが無く、長辺と南辺の隅角が同一柱穴ではないこともあります。建物というよりは区画柵列であろう。長辺と短辺はほぼ直角で有意な関係にある。東辺柱列は5.0m、南辺柱列は2.7m。長軸方位はN (磁北) - 43.5° - W。短辺のSP101より弥生時代終末期の在地系鉢形土器が出土し (図14-1, PL.11-4, PL.11-5・6)、弥生時代の集落に伴う可能性がある。SC04 (I A期か?) とは方位がほぼ直交し、少し振れるがST001壺形土器 (I B期か?) とも直交方位が近い。弥生時代終末

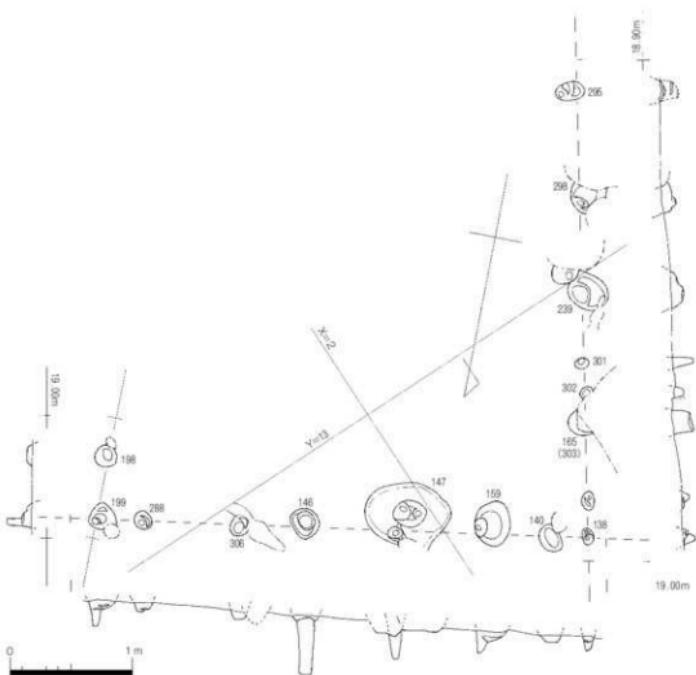


図13 掘立柱建物(5) (SB12) (1/40)

期でよいだろう。

・ SB06 (図11中段右)

I区北西部からII区南東部にかけて検出。反転後の図面合成によるものなので、整理作業過程での推測である。しかし東辺と北辺はほぼ直角である。SC01に切られるとみられる（貼床痕跡除去後に確認された柱穴がある）。隅角のSC001-b下のSPからSP293に延びる北辺の柱間が狭く、隅角SPからSP005 (PL.7-6) の柱間が広いので (SC001-a下の凹みはSC001の掘方の凹みか)、後者が梁間で、1間か。前者は桁行とするとさらに西側に延びる可能性があり、推定 1×3 間か。北辺は2.2m、東辺は1.8m。桁行方向と推定する北辺を基準とすると、方位はN-80°-Wである。奈良時代と推定したSC01に切られるが、他の建物で奈良時代の可能性があるSB02、SB08と方位の傾向が類似し、(飛鳥～) 奈良時代の遺構群の変遷の中で捉えられるものか。

・ SB07 (図11下段)

II区北側で検出した。桁行方向はさらに北西側に延びる可能性もあるが、一応 1×2 間とする。桁行北辺の北側柱穴は調査区外となる。 1×2 間として、桁行3.15m、梁間2.25mである。SB01、SB04、SC02などと重複関係にあるが、直接的な前後関係は不明である。しかし、長軸方位がN-66.5°-Wであるのは、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構群の方位に近い。

・SB11（図12上段左）

II区東側で検出した。柱構成は東側の調査区外に折り返す可能性を考えるが、あるいは二本柱の竪穴建物が削平されたものである可能性も考慮される。柱穴底面には、SP193・SP194ともに2つの柱圧痕があり、建替えがあった可能性がある。柱間は2.2m。方位はN-35°-Wで、SC06の方位に近く、隣接して共存したか、前後する時期の建物の可能性があり、弥生時代後期後半前後であろう。

・SB08（図12上段右）

II区中央～西側で検出した。柱間が一定ではなく、一応1×3間とするが、桁行の途中のピットは東柱的なもので実質1×1間か。北東隅角（SP187またはSP188）と南西隅角（SP214）は比較的しっかりした柱穴である。梁間2.15～2.25m、桁行2.95mである。桁行の方位はN（磁北）-90°-Wで、奈良時代前後の遺構群の方位に近い、奈良時代の遺構と推定する。ただし、SP214からは弥生時代後期の土器片が出土している（図14-5-8、PL.11-5）。

・SB09（図12下段左）

II区南側で検出した。柱間が一定ではないが、1×3間の建物と考える。梁間南辺のSP207またはSP210、桁行西辺のSP294は伴わないか、もしくは東柱であろう。梁間1.6～1.7m×桁行4.0mであり、方位はN-43°-Eである。SB05、SB08、SB11、SB04と重複関係にあるが、直接的前後関係は不明である。出土遺物はほとんどなく時期不詳だが、SB05、SB04、SC04、SC05などの方位に近く、弥生時代終末期を前後する遺構の可能性がある。

・SB10（図12下段右）

I区北西側から、一部II区南西隅にかかる建物である。SC01に切られると考えられる。1×1間で、1.7～1.8m×1.9～2.0mである。長軸（桁行）の方位はN-2°-Wで、奈良時代の遺構群に近い。SC01の直前に営まれた納屋的な小規模な倉庫建築であろうか。

・SB12（図13）

II区で検出した。小規模なピットが多いが、有意な柱穴列として図を提示する。SP138からSP199の北辺は4.1m、SP138からSP295の西辺は3.7m（SP203までなら5.1m）である。北辺のSP199の東側延長が不明で（調査区外に延びる可能性もある）、あるいは南側に折り返す可能性を考えたがその延長が無い。西辺は図ではSP295までとするが、SP203まで延びる可能性がある（図5参照）。しかしいずれにしても東側に折り返す柱穴が見あたらない。したがって、このSB12の柱穴列の推定が正しければ、完結する掘立柱建物ではなく、区画欄列となろう。西辺の方位はN-12.5°-W、北辺の方位はN-81.5°-Eであり、厳密に直角にならないが、この程度のズレであれば官衙クラスでの限り、一般集落内の区画としてはありうるものである。方位の傾向としては奈良時代前後の遺構群に近く、遺構として成立すれば、奈良時代の集落における区画であろう。

その他、II区中央～北西側にかけて、SP189-SP286を梁間東辺とする東西の長棟建物（SB13）がある可能性があるが、拾った柱穴に確実でないものや、他の「建物」に比定した柱穴が桁行列に含まれるので、図面の提示をしなかった（図5参照）。この建物が成立する場合、桁行南辺はSP189-SP225またはSP226のラインの桁行長5.3m（3間？）、梁間は1間で2.1mとなる。方位はN-68°-Eであり、建物とすれば（欄列の可能性もある）弥生時代後期の可能性があるが、何とも言えない。

さらに他にも、II区南西側からII区北隅にかけて、N-3°-E（方位北は磁北なので西偏約6°であり実質真北に近くなる）前後の方位で、幅3.5m前後の帯（SB14?の柱穴列？を南限とする帯状の範囲）で幾つか柱穴列が拾える（図5参照）。奈良時代の遺構群の方位に近く、谷部に降りる通路を示すような区画欄列が存在した可能性があり、北側隣接調査区の18次地点東側にもその延長と思しきピット群がある（図3）。

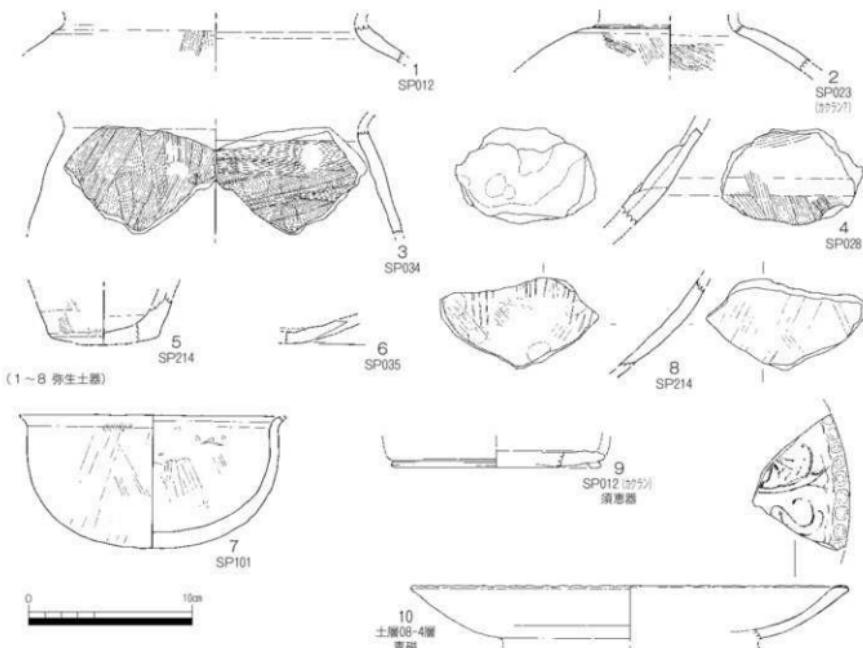


図14 南八幡17次各遺構・包含層出土土器・陶磁器 (1/3)

(4) 出土遺物 (図14・15)

・土器および陶磁器 (図14)

1は弥生時代終末期前後の在地系壺形土器の頭部～肩部の破片。SP120出土 (SB01)。小片のため頭部復元径は前後する可能性がある。外面は胴部タテハケ後、頭部ヨコナデ。内面はナデ、頭部ヨコナデ。橙色 (2.5~5YR6/8) を呈する。胎土には0.5~2mmの砂粒をやや多く含む。2は弥生時代終末期前後の壺形土器の頭部～肩部の破片。小片のため頭部復元径は前後する可能性がある。SP023出土とあるが攢乱である。あるいは周期的に古墳時代初頭 (II A期) 以降の古式土師器の可能性もあるが、在地系壺である。外面は胴部タテハケまたはナナメハケ後、頭部ヨコナデで一部沈線状。内面はナナメハケ (指オサエ痕あり)、頭部ヨコナデ。明赤褐色 (2.5YR5/6~5/8) を呈する。胎土には0.5~1mmの砂粒をやや多く含むが、黒雲母粒みられない。3は弥生時代後期後半の甕 (機能的には「鍋」) 形土器の胴部上半の破片。破片のため頭部復元径は前後する可能性がある。SP034出土 (SC05)。口径よりも胴部最大径が大きい形態で、この口径／胴部比は後期後半までの型式もしくは逆に古墳時代前期に下る在地系甕の型式だが、丁寧な作りから前者である。外面に僅かにスス痕跡あり。外面は、タテハケ、内面は指オサエ整形後にヨコハケないしナナメハケ。色調は、内外面が橙色 (5YR7/8)、断面がにぶい橙色 (5YR7/4)。胎土には0.5~1mm前後の砂粒が含まれ、金色の黒雲母微粒を少し含む。4は弥生時代後期後半から古墳時代初頭までの在地系壺形土器胴部下半の破片。

SP028出土 (SC06-b)。外面はハケを切るヨコナデ痕跡があるが、突帯剥離痕跡の可能性もある。その場合、やや法量の大きい（破片から径が復元困難）複合口縁壺または広口壺となるか。外面は、磨滅していく不明瞭だが、タテハケないし左上ナナメハケ、ヨコナデ痕跡より上は右上ナナメハケである。内面は、磨滅が著しく不明だが、ナデ仕上げか。色調は、内外面が赤っぽい橙色 (2.5YR6/8)、断面が橙色 (7.5YR7/6)。胎土には0.5~3mmの石英主体の砂粒をやや多く含む。**5**は弥生時代後期後半の甕（機能的には「鍋」）形土器の底部付近の破片。**SP214**出土 (SB08) だが、建物自体は奈良時代前後と推定されるので、直接に伴うものではないだろう。底部は平底の名残がある凸レンズ状底で、底面から胴部へ移行する外形線がやや外反気味の部分がある直線的なものであり、終末期に下らない型式であろう。外面は、底面がナデ、胴部はタテハケ後、底部に近い部分に横方向のナデが少しかかる。内面はナデとみられる。色調は、外面が灰黄褐色 (10YR5/2)、内面が灰色 (5YR4/1)、断面が灰黄色 (2.5Y6/2) から外面近くは赤橙色 (10R6/6)、外底面にはぶい黄橙色 (10YR7/4) をそれぞれ呈する。胎土には0.5~2mm前後の長石を主体とした砂粒が含まれる。**6**は弥生時代後期後半~終末期の在地系壺形土器（鉢形土器の可能性も皆無ではない）の底部片である。小片のため径の復元はしないでおく。**SP035**出土 (SC04)。平底の名残があるやや小さめの凸レンズ状底と思われ、外表面が底面より上方が剥離して正確ではないが、おそらく丸底に近づいた段階であり、後期後半よりは終末期 (I A~I B期) の底部であろう。外面は磨滅・剥離が多く不明瞭だが、（タテハケ後？）ナデ。内面はナデおよび指オサエである。色調は、外面が浅黄橙色 (10YR8/3)、内面が暗灰黄色、断面が黒褐色 (2.5Y3/1) である。0.5~2mmの砂粒を含む。**7**は弥生時代（後期後半~）終末期の在地系鉢形土器。約1/2弱の遺存。口縁部端が欠損している。口縁部は、ポール状の体部から僅かに外反して短く終わり、すばめる感じであろう。底部は僅かに平底部分があるが、ほぼ丸底と言っていい。小型土器のため後期後半でも丸底はあり得るが、一応、終末期の可能性が高いと思われる。器高6.0cm、推定復元口径16.2cm、頭部径15.2cm、体部最大径15.2cmである。外面は、体部がタテハケ後ナデ、下半から底部付近はタテハケ後にミガキに近い原体不明のカキナデ、口縁部はヨコナデ。内面は、体部タテハケ後に下位～中位はミガキに近いナデ、上位はケズリ状の板ナデ（？）後にナデ、口縁部はヨコナデを施す。胎土には、0.5~3mmまでの石英主体の砂粒をやや多く含み、金色の黒雲母微粒を少し含む。色調は、外面が灰白色~浅黄橙色 (10YR8/2~10YR8/3)、内面が灰黄褐色 (10YR5/2) を呈する。**8**は弥生土器の壺形土器（大甕か？）の胴部下半の破片と思われる。径の復元は困難である。**SP214**出土 (SB08)。外面は磨滅が顕著で不明だが、おそらく（不確実だがタテハケ後？）ナデ。内面は、（整形の指オサエ後）、粗い間隔の条痕（クシ状）のタテハケ後にナデを施すようである。内面調整から、弥生時代後期でも終末期などよりやや古いものか。建物**SB08**は前述のように古代と考えられるので、遺物は混入か。

9は奈良時代の須恵器で、高台付坏の底部破片。高台の位置と形状から8世紀後半か。**SP012**出土とあるが攤乱である。内外面ともに回転ナデ調整。高台の接地面の径は11.7cm、高台径は12.65cm、体部への屈曲部径は13.0cm（約1/6周からの復元径）。良好な還元炎焼成で、色調は明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) から灰色である。胎土は緻密で、0.5~1mmの長石を少量含む。遺構の説明で述べたように、また周囲の調査状況からも、今回の調査区に奈良時代前後の遺構が一定数あったとみられるが、その時期の遺物はこれ以外にもあるが、小片ばかりで非常に少なかった。

10は国産の肥前陶磁の青磁（青白磁か）皿の破片。「II区土層08」の4層（盛土層）出土で、口縁部形状な



図15 金属器実測図 (2/3)

どちらから19世紀以降、近世後期のものか。口縁部は細かい波状となり、口縁部内側は上方に面を形成し隅丸方形状の刻目文を施す。内面は型抜陽刻による草花文である。外面に施文はない。遺存箇所は全て施釉がある。表面は、薄い水色から淡緑青色の釉、胎土は灰白色で、非常に緻密で気泡がみられない。体部下部の屈曲から高台が付くと思われる。

・金属器（図15）

2は鉄製刀子ですでに記述した（17頁）。1は銅環で、径25×26mm、青銅製の芯金は径2.0～2.5mmで、これを環状に折り曲げている。一部に金色に見える表面があり、分析をしていないが、鍍金の可能性がある。形態的に古墳時代～飛鳥時代（7世紀）の耳環の可能性もあるが、出土層位が近現代表土中であり（II区北西側表土）、後世の飾金具などの可能性も否定できない。

III.まとめ

今回の調査では、主に弥生時代後期後半～終末期前後の集落と甕棺墓を検出した。一方、遺物は少ないものの、遺構方位の傾向から、奈良時代前後の遺構群も存在したものと推定した。周囲調査成果から奈良時代の遺構分布を想定していたが、主体は弥生時代であった。しかし、南西側100mの9次調査では同時期の集落が分布しており、17次調査は9次地点から続く集落域の縁辺部の可能性がある。甕棺墓は、非成人棺のため居住域に単独的に存在したと考えたが、墳墓が周囲に散在している可能性もあり、今後注意を要する。ただし、1931年に中山平次郎が弥生時代～古墳時代初めの墳墓群を報告している遺跡群北西の当時桑畠であった区域が、当時の南八幡遺跡全体の集団墓地（墳墓域）であった可能性もある（「遺跡の立地と周辺の歴史的環境」および図1参照）。

また、北側谷部への落ち際斜面にあるピット群については、一部は建物跡とみられたが、複数の柵列跡が想定された。弥生時代集落の丘陵（段丘）縁辺部に柵列が廻る例として、三沢一ノ口遺跡（小郡市）がある。本調査事例は弥生・奈良時代双方にその可能性がある。谷部にかかる斜面は、多くの場合遺構が希薄で調査対象になりにくいが、段丘縁辺部での遺構検出における課題となろう。



1. I 区遺構検出清掃状況（北西から）



2. I 区遺構掘削状況（北西から）



1. I 区遺構掘削状況（南西から）



2. II 区遺構検出清掃状況（南東から）



1. II区遺構換出清掃状況（北西から）



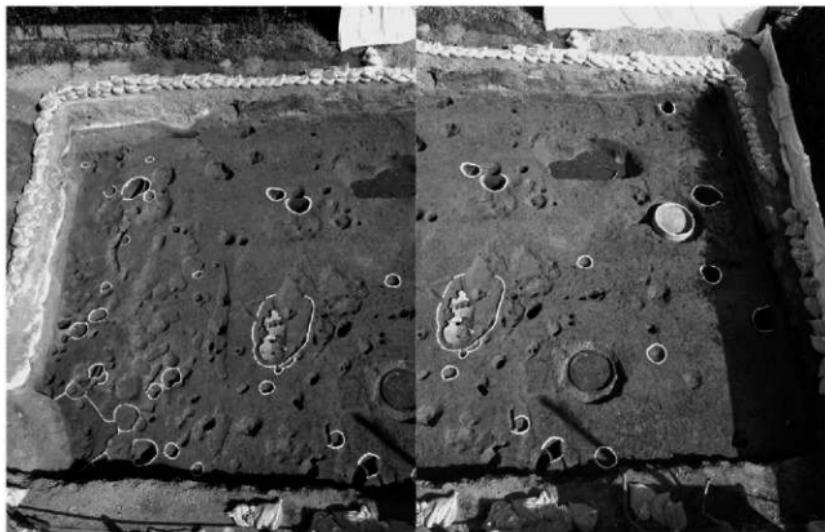
2. II区遺構掘削状況（南西から）



1. II区遺構掘削状況（南東から）



2. II区北側隣壁面土層状況（南から）



1. I 区北半～中央遺構掘削状況（南西から）

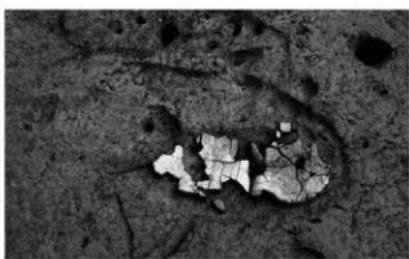
2. I 区中央～南半遺構掘削状況（南西から）



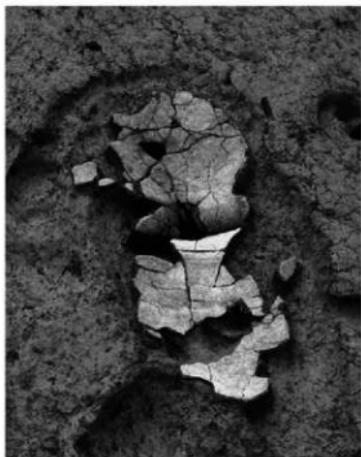
3. I 区ST001斐棺墓検出状況（西から）



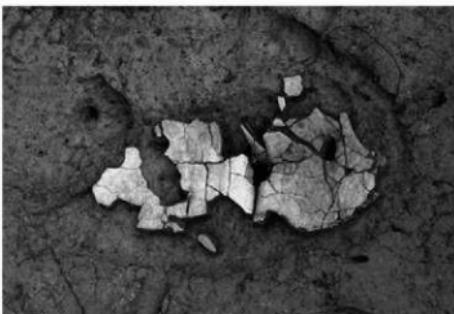
4. I 区ST001斐棺墓検出状況（北から）



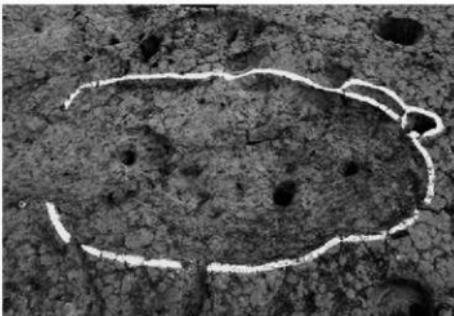
5. I 区ST001斐棺墓出土状況（精査後、北から）



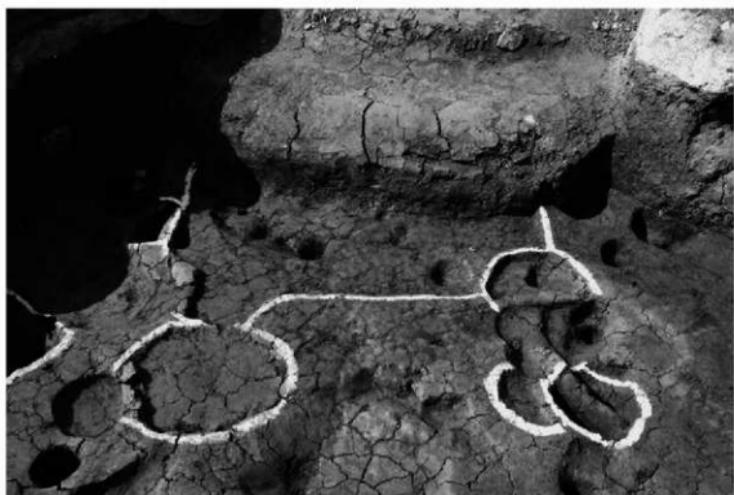
1. I区ST001壺棺墓出土状況（精査後、東から）



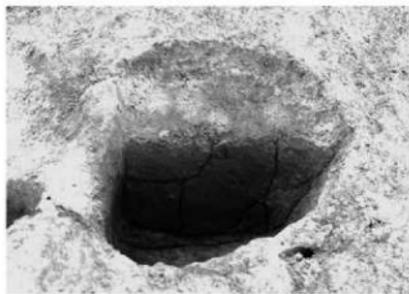
2. I区ST001壺棺墓出土状況（精査後、北から）



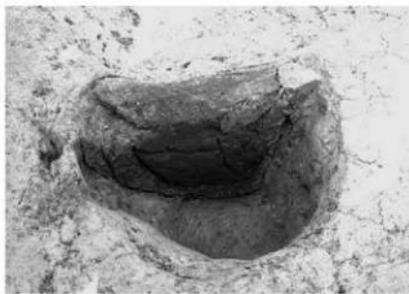
3. I区ST001壺棺墓掘方完掘状況（北から）



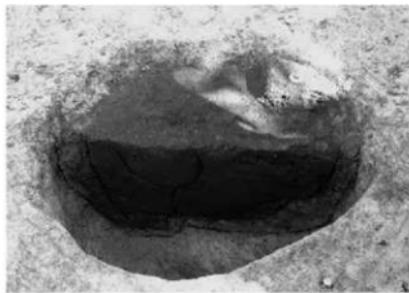
4. SC001南東半（I区側）掘削状況（東から）



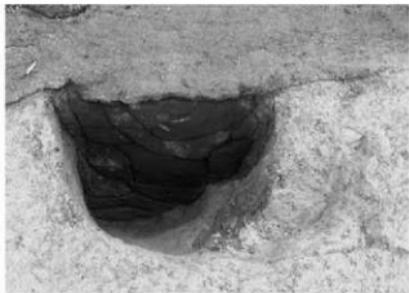
1. I区SP035土層 (SC04柱穴、北から)



2. I区SP032土層 (SC04柱穴、北から)



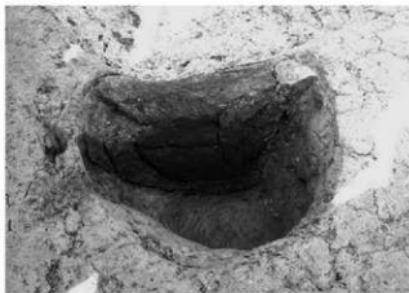
3. I区SP034土層 (SC05柱穴、西から)



4. I区SP036土層 (SC05柱穴、北から)



5. I区SP018土層 (SC06a柱穴、南西から)



6. I区SP005土層 (SB006柱穴、南から)



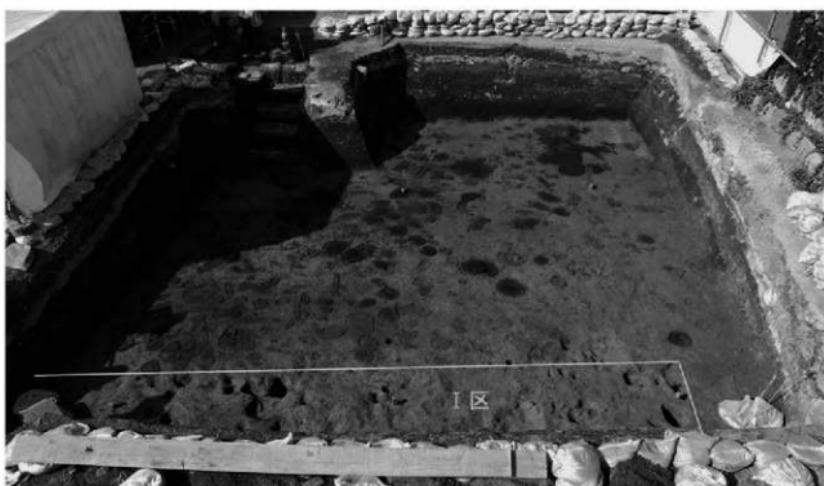
1. II区反転掘削直後の遺構検出面状況（北から）



2. II区北側遺構検出清掃状況（南西から）



3. II区中央～西側遺構検出清掃状況（北西から）



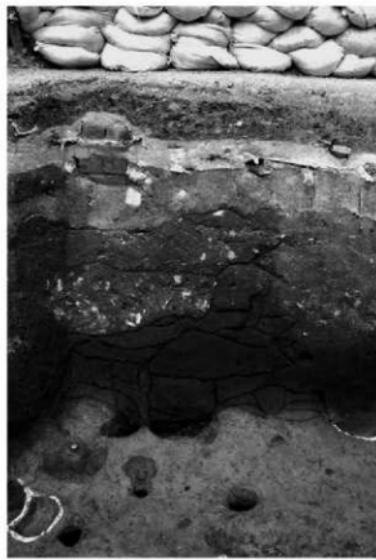
4. II区遺構検出清掃状況（南東から）



1. II区西壁中央土層（壁面土層06. 中心Y=11）



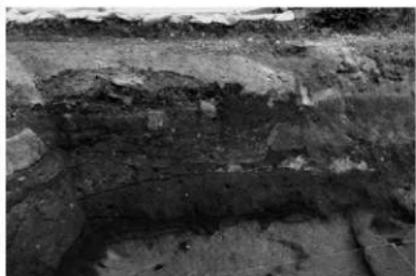
2. II区西壁北端土層北端（壁面土層07. 左側Y=13）



3. II区北壁西侧土層（壁面土層10. 左X=3）



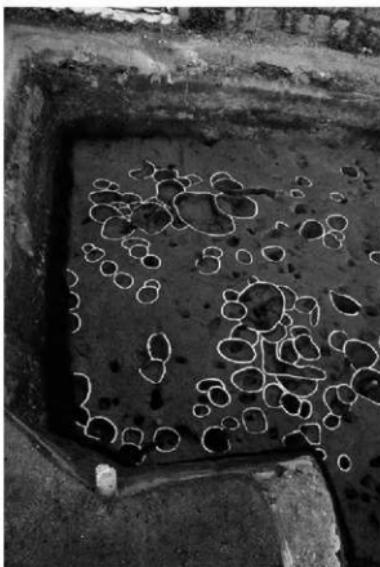
4. II区（北隅）北壁東側土層（壁面土層09. 左X=0）



5. II区（北隅）東壁北側土層（壁面土層08. Y=15前後）



1. II区北側遺構掘削状況（北東から）



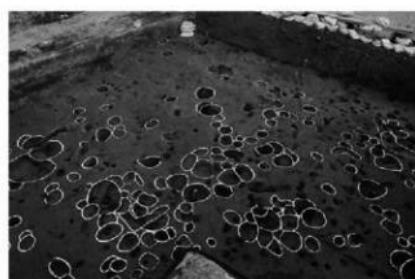
2. II区北側遺構掘削状況（南西から）



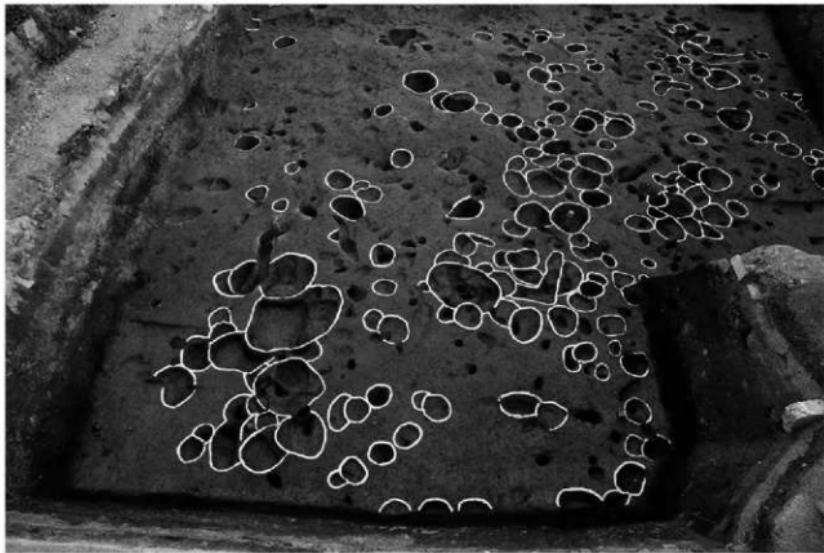
3. II区北側遺構掘削状況（北西から）



5. II区西側遺構掘削状況（北西から）



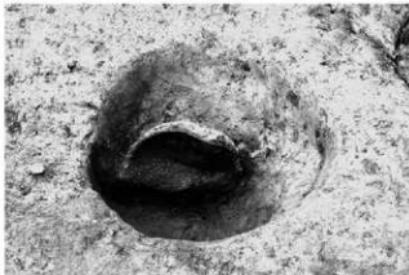
4. II区中央部遺構掘削状況（西から）



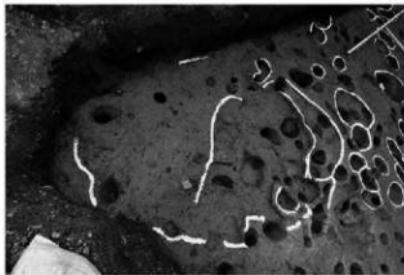
1. II区遺構掘削状況（北西から）



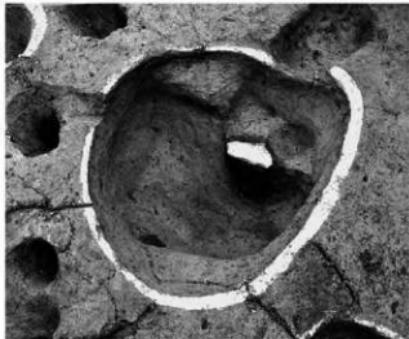
2. II区SX352 (SC001北半) (西から)



4. II区SP101 (SB05) 土器出土状況 (西から)



3. II区SX352 (SC001北半) (西から)



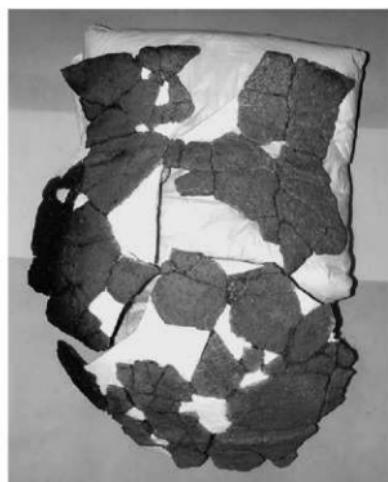
5. II区SP214 (SB08) 土器出土状況 (北から)



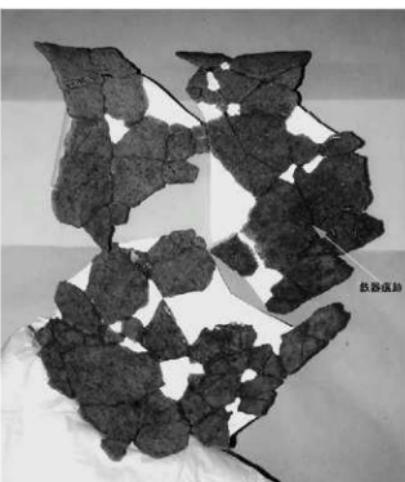
1. ST001A (図7-1) 外面



2. ST001A (図7-1) 内面



3. ST001B (図7-2) 外面



4. ST001B (図7-2) 内面



5・6. SP101出土赤生土器鉢 (図14-8)



7. 壁面出土青磁 (図14-10) 内面